文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」

CASP

COMMUNITY ACTIVATION SUPPORT PROJECT

令和２年度 研究開発報告書

探究による人づくり

～熱海高校の挑戦～

静岡県立熱海高等学校

TEL：0557-68-3291

住所：静岡県熱海市下多賀 1484-22

ONE TEAM 熱海
挑戦の記録 たひい☆

イメージキャラクター：きゃすひい

目　　次

本校校長より…… 3
本事業の概要…… 4
カリキュラム開発等専門家より…… 6
地域協働学習実施支援員より…… 7
熱高ラボ…… 8
熱海ラボ…… 12
ビジネス観光類型…… 19
福祉類型…… 24
家庭科〈熱海食育カレンダー〉…… 29
パソコン部…… 32
報道部…… 35
吹奏楽部…… 38
ボランティア部…… 39
エイサー部…… 41
キャリアカフェ…… 43
地元企業ガイダンス…… 45
インターンシップ…… 47
評価開発グループ…… 52
校内地域連携推進員会…… 64

地域連携は人間教育

校長　　石田金也

私は一昨年の秋から東海道五十三次の旅を始めた。旅と言ったら大げさだが、休日を利用して少しずつ歩くというものだ。東京日本橋を起点に京都三条大橋までの総距離約５００Kmの道のりだが、その途中途中に歴史の風情が感じられて面白い。芝の増上寺と東京タワーを横目に見つつ、高輪泉岳寺では四十七士に思いを馳せ、真夏の箱根峠越えに汗を絞り、宇津ノ谷峠では『伊勢物語』の歌を心で唱え、といった具合に。また別の楽しみとして、名所ではない唯の街並みに、何とも言えない、そこに住む人々の生活の匂いを感じることがある。この「匂い」を感じるのは、自分がその土地にとっての「他者」であるからだろう。実際に毎日当たり前にそこで生活している当事者にとって、いちいちこんな「匂い」を感じている暇はない。

今からおよそ４０年前、私は１８年間生まれ育った西伊豆の地を離れ、東京の大学に通うことになった。電車も通っていない「ど」が付くほどの田舎育ちの私は、３月の下旬、自宅近くのバス停から、母と姉に見送られて東京に旅立った。バスの最後尾の座席に座って振り向くと、二人がずっと手を振ってくれていた。この時、今まで全く経験をしたことのない感覚に襲われた。何とも表現し難い寂しさと言うか、孤独感と言うか…。私はこの時初めて故郷を離れるという経験をしたのだが、これ以降「郷愁」といった感覚を知ることになる。今まで全くと言っていいほど自覚することのなかった「故郷」というものが、自分の中に実感として形成されることになった。

熱海高校の文科省指定地域連携事業は２年目を迎えたが、この取組によって直ちに地域愛を持てとか、全ての生徒に地域に残って活躍せよとは言えない。私は一度は地域を離れてみることも貴重な経験だと思っている。一度「他者」となって、客観的に故郷を見つめ直し、改めて今まで気づかなかった故郷の「匂い」を実感することは決して無駄なことではない。この取組は、生徒をいかに人間的に成長させるか、といった点に重点を置いている。地域の人々と接し、社会の仕組みや大人の考え方を学んだり、仲間同士で協力し合うことによって、自己肯定感を高めたり主体性を身につけたりすることができる。こうして人間的に成長できた生徒一人ひとりが、それぞれの人生を歩む中で、いずれ何らかの形で地域に貢献できればいいのではないか。

今年度はコロナ感染症の拡大により、思うような取組ができなかった。だがこれも現実の世界なのだ。こういう状況下において地域はいかに立ち向かっているのかを学ぶことも生きた学習だろう。３年生の「高校生ホテル」はやむを得ず中止となった。お詫びの電話をしたり手紙を書いたりした。中止の記者会見も行った。ところが逆にお客様から励ましの手紙を頂いたりもした。全てが貴重な研修となった。逆境にいかに対応するか、これもこの地域連携事業の大事な要素であり、生徒たちは人間的に大きく成長できた。

この地域連携の取組を通して、熱海高校の生徒に対して温かくご指導、ご支援頂いている全ての方々に感謝の気持ちを込めて、この冊子をお送りします。

本 事 業 の 概 要

外部資源を有効に活用した、地域を担う「人財」の育成
～地域に育ち、地域に育ててもらうキャリア教育～

事業の目的・目標

地元企業、自治体（熱海市）、熱海伊東法人会、地元小中学校、伊豆半島ジオパーク推進協議会等と連携・協働することにより、地域課題の解決等の探究的な学びを通して、地域への課題意識や貢献意識を高め、地域を担う「人財」（人材）の育成を図ります。

（１） 本事業を通じて育成する地域人材像は次のとおりです。

本事業では、地域が抱える課題を自ら探り、課題解決のために主体的に取り組む人材のことを**「熱海人(あたみんちゅ)」**と名付けました。沖縄の方言で「海人(うみんちゅ)」は海と深く関わりのある漁師を指し、「ウチナーンチュ」は地元を愛する沖縄本島の人々を意味します。沖縄に負けず劣らず美しい海と山に囲まれた熱海で、地元に根ざし、誇りを持って生きる人材が育まれるよう願いを込めました。具体的には以下の６つの資質・能力を兼ね備えた人材と定義します。

（ア） 「課題先進地域」2050 年の日本の地方都市「熱海」が抱える課題を**「自分事」**としてリアルに考えることができる人材。
（イ） どんなに困難な課題であっても**あきらめずにしがみ付く**人材。
（ウ） 高校生の特権である正義と公正と理想を武器にひるむことなく**大人と渡り合える**人材。
（エ） 現実に直面し、くじけそうになっても、**仲間と協力し新たなアプローチを考え出す**ことができる人材。
（オ） 見返りを求めず、**地域住民の喜ぶ顔を見て良かったと思うことができる**人材。
（カ） たとえ、**熱海でないどこかであっても同様にその地域の抱える課題に立ち向かい、地域のために貢献できる**人材。

（２）卒業までに生徒に習得させる具体的能力は、次のとおりです。

（１）の人材像を踏まえ、本事業を通じて生徒に習得させる能力は、「探究力」・「主体性」・「協調性」の３つの能力を想定しています。解のない課題に立ち向かうためには、これらの能力が必要不可欠であると考えています。

能力	具体的能力の構成要素
探究力	読解力、文章表現能力、数的処理能力、価値の創造、好奇心、知識欲、解決欲求、表現力、思考力、判断力
主体性	リーダーシップ、自発性、自主性、積極性、自律性、やり抜く力、企画力、創造力、提案力
協調性	コミュニケーション能力、共感力、チーム志向、敬愛、協力、フォロワーシップ、多様性、寛容、受容

プロジェクト名　地域との協働による高等学校教育改革推進事業（文科省）

管理機関：静岡県教育委員会
地域協働推進校：静岡県立熱海高等学校

プロジェクトの趣旨・目的（文科省）
高等学校と市町村、大学、産業界等が協働して①コンソーシアムを構築し、高等学校における②地域課題の解決等の探究的な学びを通して、③未来を切り拓くために必要な資質・能力を身に付けるとともに、地域への課題意識や貢献意識をもち、将来、④地域で地域ならではの新しい価値を創造し、新たな時代を地域から分厚く支えることのできる人材（＝地域人材）の育成を図ることとする。

Ⅰ　研究開発構想名
「外部資源を有効に活用した、地域を担う『人財』の育成～地域に育ち、地域に育ててもらうキャリア教育～」
Ⅱ　研究開発の概要
地元企業、自治体（熱海市）、熱海伊東法人会、小中学校等と連携・協働することにより、地域課題の解決等の探究的な学びを通して、地域への課題意識や貢献意識を持ち、地域を担う「人財」の育成を図る。
Ⅲ　研究の目的
全国平均27.7%の高齢化率に対し、47%の熱海市は少子高齢化に伴う人口減少等、現代社会の諸課題を先取りしている地域であり、本校はこうした課題を抱える熱海市に所在する唯一の高等学校である。そこで、総合的な探究の時間や各教科等における教科横断的探究活動を通して、将来の日本の地域社会を先取りした熱海市の課題を自分のこととして捉え、地域と協働することによりその解決方法を自律的に探り、さらに熱海ならではの新たな価値の創造を目指す人材を育成することを目的とする。

④どんな地域人材を育成するのか？＝熱海人（あたみんちゅ）

- ①「課題先進地域」2050年の日本の地方都市「熱海」が抱える課題を「自分事」としてリアルに考え、
- ②どんなに困難な課題であってもあきらめずにしがみ付き、
- ③高校生の特権である正義と公正と理想を武器にひるむことなく大人と渡り合い、
- ④現実に直面し、くじけそうになっても、仲間と協力し新たなアプローチを考え出し、
- ⑤見返りを求めず、地域住民の喜ぶ顔を見て良かったと思い、
- ⑥たとえ、熱海でないどこかであっても同様にその地域の抱える課題に立ち向かい、地域のために貢献できる人材

③未来を切り拓くために必要な資質・能力　⇒　熱海高校で育成する３つの能力

探究力
- 読解力、文章表現力、数的処理能力
- 価値の創造、好奇心、知識欲、解決欲求
- 表現力、思考力、判断力

主体性
- リーダーシップ、自発的、自主的、積極性、自律性、やり抜く力
- 企画力、創造力、提案力

協調性
- コミュニケーション能力、共感力、チーム志向、敬愛、協力
- フォロワーシップ、多様性、寛容、受容

＜本校の教育方針＞
- 自発的に学習し、自主的に判断し、自律的に行動できる人間の育成
- 民主的な社会の形成者として、敬愛と協力の精神を持ち、誠実に生き、かつ働く健康な人間の育成
- 故郷を大切にし、将来にわたり地域を支える人間の育成

①コンソーシアム

Ⅰ　総合的な探究の時間（桃陵）
- 地域課題のテーマ設定、解決方法
  - 「観光」観光と地場産業
  - 「福祉」高齢化、バリアフリー
  - 「防災」津波対策
  - 「国際交流」外国人労働者
  - 「エネルギー資源」温泉活用
- 企業、自治体と協働し企業が求める人材の考察を通し、将来の生き方を考える。

現在の熱海
年少人口 3%
生産年齢人口 50%
高齢人口 47%

30代未婚率全国ワースト１位 48.5%

生活保護者率 1.67 静岡県ワースト２位

空家率 50.7% 静岡県ワースト１位

②「地域課題の解決等の探究的な学び」を進める方法

立ち向かえ 解のない課題へ

Ⅰ 総合的な探究の時間（探究・教科横断的学習）【桃陵】

Ⅱ 授業　Ⅲ 部活動　Ⅳ 特別活動

Ⅱ　授業での取組例
- 商業　高校生ホテル、ツアープラン、商品開発、実習、起業家育成プロジェクト
- 福祉　多賀小との交流、実習、介護食の開発
- 英語　観光チラシの作成、街頭インタビュー対策
- 国語　効果的なインタビュー、プレゼン方法
- 社会　熱海の史跡（神社等の歴史）
- 理科　熱海のジオ
- 家庭　熱海特産品の調理法開発
- 保体　健康増進（温泉の効用）
- 数学　データ分析等

Ⅲ　部活動での取組
- ・エイサー部、ボランティア部
  地元施設訪問、イベントでの発表、手伝い等の地域貢献、異校種交流
- ・運動部
  地元祭りへの参加
- ・報道部
  企業とコラボした広報誌作成

Ⅳ　特別活動
- ・熱海市2030会議参加、子ども食堂開催
- ・社会人講話

カリキュラム開発等専門家より

静岡文化芸術大学 文化政策学部 文化政策学科　船戸 修一

高校生が栽培したレモンや開発した商品の販売や返礼を通じた『卒業生』とのネットワーク構築

昨今、高等学校とその学校が立地する地域の関連団体との協働や連携を図った取り組みが盛んである。その取り組みとして地域の資源を活かし高校生の発想やアイデアを活かした商品開発があげられる。ここ熱海高校も、昨年、地元のパン屋と共同開発したスコーンや熱海高校生が収穫した生レモンを販売している。そもそも熱海市はレモンの国内栽培発祥の地とされている。それゆえ、このレモンには地元産という「土地」とのつながりだけでなく、発祥の地という地域固有の「歴史」という履歴も付随する地域資源である。今後、熱海の有力な地域ブランドになる可能性を秘めている。

さて、そのレモン開発に対して熱海高校は、どのような独自貢献ができるであろうか。それは昨年度の報告書でも記したが、「卒業生」の活用にあると思われる。確かに高校生たちでレモンの植樹をし、栽培管理し、それを収穫するだけでも地域貢献の一つであろう。また地場産商品の販売を手伝うことも地域社会のエンパワーメントになるかもしれない。しかし、これでは高校が有する独自性は活かされていると言えない。というのも、このような取り組みに単にマンパワーが必要ならば、別に高校生である必然性はないからだ。

そこで提案したいのが卒業生を販売対象とした農産物収穫や商品開発である。往々にして高校生が収穫した農産物や開発した商品は、話題性はあるものの、販路が確立しておらず、売れ残る可能性はある。しかし、卒業生ならば自分たちの出身校のため、在校生が収穫した農産物や開発した商品の購入に対しては良心的な理解があると思われる。卒業生を購入者とすれば、これら農産物や商品の完売も期待でき、プロジェクトに参加した在校生の充実感や達成感も得られる可能性も高い。

もし学校教育プログラムで栽培した農産物や開発した商品の販売が難しいならば、クラウドファンディングで卒業生を対象にしたレモン生産や商品開発のプロジェクトを立ち上げ、それに賛同した卒業生に対して「返礼品」として送るのも一つの方法かもしれない。その返礼品を送付する際、最近の母校の取り組みや近況をまとめた『熱高通信』あるいは『熱高ニュース』も送り、在校生の「頑張り」を卒業生に伝えることもできる。このように在校生が栽培に取り組んだレモンや開発した商品の販売や返礼を通じて卒業生を地元熱海とつなげるネットワーク構築こそ、熱海高校しかできない取り組みであろう。

これまで卒業生については個人情報の守秘のため地域づくりに活用されてこなかったきらいがある。しかし地元に理解があり、近居の可能性が高い卒業生は地域社会を支える「関係人口」にもなり得る。管見の限り、卒業生を活かした地域づくりを実践している高等学校はない。レモンという地域資源だけでなく、卒業生という地域資源までも活かすことができれば、全国に先駆けたプロジェクトして熱海高校の一層の魅力化が図られると思われる。

地域協働学習実施支援員より

水　野　綾　子　（合同会社 TURNER 代表社員）

「熱海を使ったキャリア教育」　熱海を活用して、生徒たちの視野や価値観、可能性を広げる

私自身、大学から上京し都内での勤務経験を経て、2017 年に熱海に U ターンした。視点や拠点を複数持つことで、自分が置かれた環境の豊かさも、反面足りない部分も見えてくる。客観的に自身を見られることは大切だ。故に私自身、一度外に出たほうがいいと思っているものの、それが家庭の事情などで選択できない子供も一定数いる。

そこで、学校でどうその機会や学びの場を提供、担保するかは非常に重要だ。

熱海は人口 3.6 万人を切った小さなまちにもかかわらず、地元の人、熱海を選び事業を始めたり、移住する人、二拠点者、旅行者、さまざまなレイヤーで熱海に関わる人がいる。多様な価値観、多様な働き方、ライフスタイルを送る人が混在する稀有なまちだと思う。

子供たちが普段出会わないような価値観や考え方を持つ大人に、これからも積極的に出会わせたい。大事なのは、今までにない価値観を否定せず、「こういう考え方もあるのだな」とボールを一度キャッチできること（否定は未知からくることが多い。つまりは多様な考え方に触れる機会を増やすことそのものが、多様な感性や寛容さにつながる）。そしてキャッチしたボールを手に取り、「自分はどう思うのか」、「どう感じたのか」「だからどうしたいのか」に敏感になることだ。

授業で、生徒たちに大人たちの話を聞いた後に個別アンケートを書いてもらう機会があった。それぞれの言葉で感想や意見を書いてくれたのがとても面白かった。日本人の傾向として「We（私たち）」を主語に使う機会が多いように思う。所属するグループの様子を見て発言するのも、その一例だ。We で話すことが悪いことではもちろんないが、「I（私）」を主語に自分がどう思うか、どうしたいかをもっと考える機会を作りたい。

熱海高校として、今後どんな高校になっていったら良いか。数年関わらせていただいて思うのは、この 3 年を一貫して「熱海というまち、熱海で働く・生きる人」を活用させていただきながら、生徒たちがどう生きたいか、何をしたいかを見つける時間や機会にしてほしいということだ。つまり「熱海を使ったキャリア教育」と言える。

生徒たちには、高校卒業後、熱海に残ってほしいとは思っていない（なぜなら、まずは地域の大人ががんばりが必要だからだ。子供たちが自発的にここにいたい、ここで働いたら楽しそう、面白そう、と思ってもらえるまちを作るためには、大人側ががんばり、踏ん張らないといけない）。自分のために熱海を良い形で活用してほしいと思っている。熱海には、生徒たちの価値観を広げてくれる大人や企業がいる。そんな地域の力を借り連携しながら、自分で考え、選択決断していける生徒を育てて行けたらと思う。

そして、その上で熱海を選んだ生徒が社会に出た際、彼らに学びや成長の機会を提供していけるか、その後幸せに暮らして行けるのか。本当の意味での地域連携が必要になる（結果としてそれが地域企業の底上げにもなる）。形だけではなく、思いで繋がり実装する地域連携をどう構築するか。熱海高校に今求められている段階かと思う。

熱 高 ラボ

対象生徒：１年生全員
指導教員：１年部教員

地域連携実施協力者
熱海、伊東等の商業施設、役所等

取り組みの概要

熱高ラボは、１年次の総合的な探究の時間として本校に設けられている「桃陵ゼミ」の中で実施される活動である。今日、これからの時代を担う生徒には自ら課題を設定し、それを解決する能力が必要とされている。

本校の現状として、卒業生の多くが将来地元に残るかいずれは戻ってきている。地域社会の中での活躍を想定した場合、地域の現状を知ることが重要である。たとえ地元で働くことが無かったとしても、人口減少や高齢化という状態にある熱海について学ぶことは、日本の未来を考える上でも大切である。また、２年次に行われる「熱海ラボ」では、地域とより深くつながり地域で活躍する人材(熱海の地元企業の方々)と協働して、自分たちで考えをまとめ、解決することが目的となる。

そこで、１年次の「熱高ラボ」では、地域の中に潜む問題や課題を発見するために、どのように情報を収集すべきかということや、収集した情報をどのようにまとめアウトプットするのかということに関する基本的な能力を育成することを目的としている。

今年度は、生徒の関心を調査した上で、大テーマとして「観光」「温泉」「土産」「歴史」「ドラマ」「周辺地区」の６つを設定し、生徒が興味関心のあるテーマを選択した。その後、似たようなことに興味関心を持つ生徒同士で４～６人のグループになるよう調整した。大テーマ内の各グループでは、自分たちが調べたいテーマを決めて調べ学習を行うことで、そのことに関する課題とその解決策を見出し、発表することを到達目標とした。それにあたり、２度のフィールドワークを実施し、必要な情報を自分たちで集めることとした。それに際し、地域の企業や商店、商業施設にご協力いただく必要があるグループも複数存在したが、事前のアポイントメントや交渉、情報収集の手段についても、生徒自身で行うこととし、あくまで教員は生徒が行動する前の確認に留めることとした。

最終的なアウトプットの形として、各グループで収集した情報から導き出した問題や課題とその解決策をまとめ、ワールドカフェ形式で発表することとしている。

この活動全体を通して、問題や課題の発見から情報収集、それらをまとめ解決策を導き出し発表するという一連の過程について、生徒が主体的に取り組むことができるようになることを目指している。

取り組んだこと

6/25(木)　13:20～14:50　①オリエンテーション

中学校での総合的な学習の時間で何に取り組んだか振り返った上で、教員が作った熱海の文化、歴史に関するワークシートを用いて、熱海に関する基礎知識を身に付けた。その上で、自分が調べてみたいテーマを考えさせた。

ここで出た各自のテーマ案をもとに総合的な探究の時間の教科委員で話し合った結果、今年度の探究テーマのカテゴリを「観光」「温泉」「土産」「歴史」「ドラマ」「周辺地区」の６つに分けることとなった。

【オリエンテーションの様子】

7/2(木) 13:20～14:00　②グループ分け

上の６つのカテゴリごとに分かれ、興味の対象が近い者、仲が良いもの同士でグループを組んだ。グループが決まったら、より細かいテーマ設定をするよう指示した。

7/9(木) 13:20～14:00　③テーマ設定

班ごとに、細かいテーマ設定をした。各班のテーマは、下の通りである。

班番号	カテゴリ	テーマ
1班	周辺地区	熱海と沼津　若者の人気の差
2班	観光	10代女子が日帰り旅行で回れるインスタ映えスポット巡り
3班	歴史	熱海温泉の歴史
4班	観光	熱海市内のマニアックな海産物
5班	歴史	こがし祭りの食べ物・楽しさ
6班	観光	熱海の海の魚について
7班	観光	東京から来た若いカップル向けのお泊りデートプラン
8班	温泉	熱海の温泉に来た有名芸能人について
9班	温泉	温泉の設備&おもてなし
10班	ドラマ	なぜ熱海が選ばれたのか？～熱海市が舞台となったドラマやアニメの調査～
11班	土産	熱海のプリンと沼津のプリンの比較～地域活性化のアイデア～
12班	土産	映え映えお土産(食べ物)
13班	土産	かわいいスイーツ～熱海のかわいいスイーツ特集～

9/17(木) 11/5(木)、11/12(木)13:20～14:00　④⑤⑥フィールドワーク準備

今後の準備を①テーマ決定→②発表資料 構成決定→③フィールドワーク行き先決定→④発表資料作成→⑤発表準備→⑥報告資料作成、の順に行うよう指示した。

11/26(木) 13:20～14:00　⑦フィールドワーク　アポ取り

今後のフィールドワークに備え、アポ取りを実施した。慣れない企業への電話で、何を伝えればよいか分からず苦労する者が多く、良い体験となった。

12/10(木) 13:20～14:50、12/22(火) 10:00～12:00　⑧⑨フィールドワーク

各班が決めた行先へ出向き、フィールドワークを実施した。お店が混んでいて約束した時間に入れない、アポを取ったお店が行きたいお店とは違う支店だった等、小さなトラブルは起きたが、地元の「今」を肌で感じることが出来た。

【熱海駅内ラスカでのインタビュー】

【熱海市役所でのインタビュー】

【魚市場でのインタビュー】

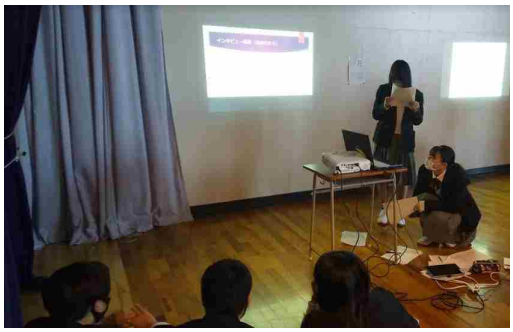
1/14(木)14:10～14:50,1/28(木)13:20～14:50　⑩⑪　発表準備

班ごとに発表準備を行った。発表方法、A4 用紙、模造紙、Keynote、PowerPoint のいずれかから好きなものを選択させた。全班統一して、まずは A4 用紙に発表計画を書かせるようにした上で、発表の型の例を伝えたことで、スムーズに準備を行うことが出来ていた。一方で、スマートフォンの写真を出力するのに苦労する班が多く出たこと、この時間内に準備が終わらない班が多く、空き時間を利用して準備を進めることになってしまったのが課題となった。

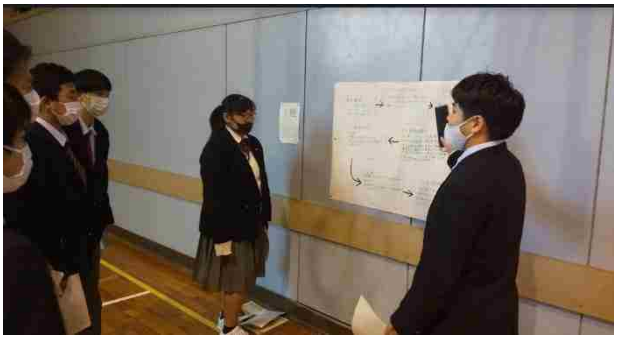
2/18(木)14:10～14:50,1/28(木)13:20～14:50　⑫⑬　発表会・熱海ラボに向けて

体育館にて発表会を行った。班の数分発表ブースを作り、３分×４回の発表を実施した。優秀な発表をした班に対しては、学年主任より表彰を行った。なお、運営は生徒が中心となって行った。

その後、体育館で２年生の熱海ラボの発表会を聞いた。先輩の発表を聞くことで、多くの者が、来年度やることのイメージを掴めた様子であった。



【パワーポイントでの発表】



【模造紙での発表】

取り組みの成果

①フィールドワークを通して、熱海という地域の魅力に気付いた様子であった。十分な事前指導が出来なかったにも関わらず、生徒たちは意欲的に質問をし、終了後は熱海の街中を回り、楽しんでいた。

②今回の熱高ラボでは、自ら課題を設定し、解決策を導き出すという活動を重視していた。こちらからテーマ例を出さなくても、自分たちでテーマを設定し、必要な情報を集めていたので、この活動は概ね出来ている様子であった。

③発表は、班ごとに工夫を凝らし、聞き手が飽きないよう配慮されたものであった。実際に、発表の時間中は笑い声や聞き手の反応が絶えず続いていた。

今後取り組むべきこと

①フィールドワークの早期実施

熱高ラボそのものは例年より早く始めていたが、発表準備そのものはフィールドワーク後となってしまったため、最終的には準備時間が足りなくなってしまっていた。できれば１学期終わりか２学期頭にはフィールドワークを実施できるようにしたい。

②準備時間の捻出

①にも関連するが、桃陵の時間で準備が終わらず、朝読書の時間に準備を進めることとなってしまった。授業内であと２時間程度準備ができれば完成するので、国語や情報などの教科とより強く連携し、計画的に準備が出来るようにしたい。

②後輩への引継ぎ

熱高ラボを初めて４年目となるが、過去の実施内容に関する資料が少ない。今年度の活動内容を次年度に引き継ぎ、来年度１年生の熱高ラボがより良いものとなるようにしたい。

熱 海 ラボ

対象生徒：２年生全員
指導教員：２年部教員

地域連携実施協力者
水野綾子氏、(参加企業) machimori、熱海市役所、NPO 法人熱海キコリーズ、瑞宝荘、caffe bar QUARTO、Atami Style、HUBlic

取り組みの概要

熱海ラボは桃陵(総合的な探究の時間)の中で、校内での活動から校外の人々と関わりながらの活動である。

本年度の熱海ラボは、様々な企業の方に講話をしていただきながら、現在の熱海の企業の「課題」について理解するとともに、熱海の現状を踏まえた上で「熱海で事業を立ち上げるとしたら」というテーマのもと調べ学習や発表などの活動をおこなった。新型コロナウイルスの影響により、フィールドワークなどの校外活動を行うことが難しい状況であったことや前年度よりも時間が限られていたため本年度の熱海ラボの目標を①地域の面白さを体感する、②活動を通して、生徒の視点や価値観を広げる、③地域を活用して小さな成功体験を積む、の３点に焦点を絞った。具体的には生徒間の意見交換のみではなく、ゲストの方々などと意見交換をする場面を多く設定することで、多くの「大人」と接することを通して、多様な価値観の育成やコミュニケーションの中で生まれる小さな成功体験を積んでほしいと考える。

今年度は９月から計８回の活動を行った。１学期は熱海周辺の企業の方々に来ていただき、講話を通して現在の熱海の企業の「課題」ついてインプットする活動を行った。２学期は１学期にインプットした知識をもとにグループで「熱海で事業を立ち上げるとしたら」というテーマでグループごと調べ学習を行った。また、１２月に熱海駅、来宮駅周辺の企業を対象にフィールドワークを行った。立ち上げる事業を決める際には①動機、②ターゲット、③事業の目的、の３点を明確にすることを意識させた。２月に各グループが考えた事業を資料にまとめて発表を行い、各グループの事業の評価をし、最後に水野様に講評をしていただいた。生徒には年間反省と地域に関係するアンケートを行い、熱海ラボの活動を通じての変化などをまとめ、次年度につなげていけるようにしたいと思っている。

取り組んだこと

【コンセプト】

・地域を使って、生徒の価値観を揺り動かす。
・正解がない時代、「自分で決める」力を養う。

熱海を選び、熱海で働く大人たちや、熱海の企業を通して生徒たちの価値観を広げる機会を作る。インプットだけではなく、大人との意見交換の場（ワークショップ形式等検討）や、実際にインプットをアウトプットに変える発表の場も設ける。

1 回目（9 月 24 日／木　13:20～14:50）

◇地域で働く若者たち「私たちが熱海を選んだわけ」

初回ということもあり、内容の主旨説明後、「熱海ラボ」への興味を持たせるため、ゲストをお呼びし、生徒と近い 20～30 代の若手がなぜ「熱海を選んだのか」「実際にいまどのような仕事をしているのか」「熱海の面白さはなにか」「高校生の頃、何を考えていたのか」などを話していただいた。ゲストのプレゼンに終わらず、グループに分かれてゲストとの質疑応答をおこなった。

2 回目（10 月 22 日／木　13:20～14:50）

◇逆境からの新しい事業、逆境をどう捉えるか？

コロナ渦を見据えて動く熱海の人たちに来ていただき、二人のゲストによるプレゼンを聞かせた。プレゼン後、小グループに分かれて意見交換をおこなわせ、質問用紙を提出させた。水野さんがピックアップした質問をゲストに答えていただいた。

3 回目（11 月 5 日／木　14:10～14:50）

熱海の現状について数字や事実から熱海市役所産業振興室の方によるプレゼンをしていただき、現状と課題を明らかにした。

4 回目（12 月 10 日／木　13:20～14:50）

◇もし、自分が今「熱海」で何か事業を立ち上げるとしたら？

これまでの熱海ラボを踏まえて、自分が起業するとしたら何ができるのか、やりたいかなどを考えさせ、グループで意見をまとめ、方向性を出した。

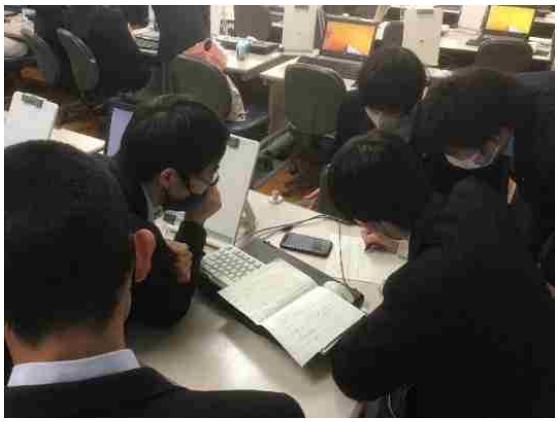
学年行事　フィールドワーク（12 月 22 日／火　10:00～12:00）

グループで意見を出し合って考えたテーマについて検証すべく熱海市内の各所でフィールドワークをおこない、必要な情報を入手し、発表に向けてのイメージを膨らめた。

5 回目（1 月 14 日／木　14:10～14:50）

◇もし、自分が今「熱海」で何か事業を立ち上げるとしたら？

フィールドワークで入手した情報をもとに、発表に向けての資料作りをおこなった。



6 回目（1 月 28 日／木　13:20～14:50）

事前に各グループの資料に目を通していただいた水野さんからのフィードバックの後、小グループに分かれて中間発表をおこない前向きな意見を出し合った。水野さんからいただいた各グループへのアドバイスをもとに、プレゼンに向けて資料のブラッシュアップと発表方法についてグループワークをおこなった。

7 回目（2 月 18 日／木　14:10～14:50）

事業者・市役所の方々によるプレゼンテーションや、調べ学習・フィールドワークを通して、事業立ち上げの動機・ターゲット・事業の目的などを中心に全 22 グループがプレゼンテーションを行い相互に評価をした。発表後、各グループで意見交換してこれまでの取組を振り返った。

取り組みの成果

（１）教師や親以外の大人と触れることで、地域の面白さを体感してもらう

・地域の人々の実際の声を聞くことで、地域の課題について考え、そこから様々なことを知り、熱海の良さを理解しようとする生徒が増えたように感じる。

（２）生徒の視点や価値観を広げる

・生徒は様々な「大人」と対話する活動を通して、「どうしてお金を借りてまで事業をやろうとするのだろう？」「なぜ熱海を選んだのだろう？」と多様な価値観について触れることで、自分以外の人の価値観について考え、自分なりに理解しようとする生徒が増えたように感じる。

（３）地域を活用して小さな成功体験を積んでもらう

・「自分の意見が使われた」「計画通りに進められた」「発表資料を完成できた」といったように大きなテーマの中で、いくつもの小さな成功体験を積んでいる生徒が多かったように感じた。また、グループで１つの目標に向かって頑張ることの楽しさや大切さをわかり始めた生徒もいたように感じた。

「熱海ラボ」という活動は、熱海の企業における「課題」について理解し、そこから「課題」を解決するために、地域にとって必要であると思われる事業を立ち上げる案をつくるまでを生徒たちが考えるというものである。生徒は１年間の活動の中で家庭や学校以外の多くの「大人」と関わったことで、社会の見方・考え方、行動が変わっていったのではないかと思われる。また、事業を立ちあげるという大きなテーマの中を達成する過程で小さな成功体験を積み重ね、自己肯定感が高まっているように感じた。

熱海はこんなにもせまいのに考えれば考えるほど課題が見つかってとても難しかったです。生まれた時から熱海に住んでいるのにまだまだ熱海のいい所、問題点などで知らないところがたくさんあるなと思いました。これから企画を考えることがあるか分からないけど現実的に考えると大変な部分がたくさん出てくるなと思いました。

一回案を出した中で、色々な課題が見えてきて、そこを解決するのに色々な状況を想像して解決するために行うことができた。しかし、高度まが考えた案は中で今の時代にとけこむようなものが考えれるとは思えないが、しっかりと熱海の弱みや強みというのを校外学習とかで分かったし、今の時代をいれられているのかなんで取り入れられてるのとかなんとなく分かった気がしないでもない

私の住んでる所は伊東なので、熱海についてあまりよく知らなかったけど、体験の時の熱高ラボから今の熱海ラボで、熱海の現状や問題について知ることができる良い機会でした。パソコンを使って資料を作ってどうしたら人に伝わるのか見やすくなるか、みんなで考えてやり、人との関わり方についても学べ人としても成長できたと思います。

熱海ラボを通して、私は熱海について深く知ることが出来たこと、また、これから先の高校生ホテルに向けての事業が観光開発の学習となったため一年前よりもっと熱海について詳しく知ることがありました。また、人と話し合うことについても学びがあり、以前よりも人と関わり方が分かるようになりました。自分の意見を率直に言うだけではなく、人の様子をみながらしっかり言えるようになりました。

一年間の授業を通して、自分たちで事業をたてるということがどれほど大変なことかを、しっかり理解できました。大変さだけではなくて、考えることや自分から行動することの大切さにも気づくこともでき、一年前の自分の考えがどんどん変わっていき、将来のことを考えられるようにもなりました。

実際に熱海に行ってみると熱海の町が実際どのように機能しているのかが知れました。熱海や、自分の知りたいことは、直接その場に行ってみて「ちゃんと知る」ということが大切ですね。
発表の際、50秒しか時間がありませんでしたが、何回か練習をすることによって、自分たちが「どこを」、「何を」伝えたいのかが明確にできて良かったです。人に伝えるということはとても難しいことです。

いろんなグループの考えを聞いてみて、「そういう考えがあるのか」「おお、すごい!」と思うグループが、2〜3グループいたので、実際につくってもらいたいなと思いました。難かしい事業だったけど、たくさん意見を言いあって、自分達なりに良いものが作れたので、意見をだしあうことは、何かをつくる時に大事なものなんだなと思いました。

今後取り組むべきこと

本年度は「熱海で事業を立ちあげるとしたら」というテーマで活動をおこなった。活動の中で教員として難しいと思ったことは、生徒たちが「課題」を理解し、その課題を踏まえた「事業」を提案するということである。事業を立ちあげるためには様々な側面から考える必要があるので事業を立ちあげるために必要な知識や立ち上げるまでの流れを学ぶ時間を確保する必要があると感じた。

また、今回は生徒と教員で評価を行ったが、実際に熱海の企業の方々にお越しいただき評価していただく機会を設ける必要があると考える。

生徒発表資料

「熱海からこんにちは！！」

私たち班は熱海のスイーツを広めていき、また、熱海発祥のレモンを使ったスイーツを作って若者の観光客、女性をターゲットにして広めたいと考えました。

まず熱海の人気のスイーツのことを知ろうと思い、ネットのロコミから私たちはBonBonBERRYとフルーツキングへ足を運びスイーツを食べてきました。

BonBonBERRYは、イチゴ専門店とするいちごのスイーツを販売しています。いちごスイーツの夢のアトリエで、いちごを主役にしたスイーツ店です。テレビやメディアにも取り上げられている店です。

フルーツキングは、フルーツサンドとフルーツゼリーなど、フルーツを使ったスイーツを販売しています。店内には砂がありまるで海気分を味わえます。SNS映えもしっかりしていて巨大プランコ今写真撮影に使えるフルーツの置物があります。

・フルーツサンドは、もちもちとしたパンで挟まれた生クリームと果実いっぱいのフルーツです。

・フルーツゼリーは、ゴロゴロのスイーツが入っていて凍らかなゼリーが入っています。上にはソフトクリームがトッピングできます。

どちらのお店も女性をターゲットにしている！

私たちは、熱海の人気のスイーツを他県や他の市の人に食べてもらいたいです。また、観光客が喜びそうなスイーツ開発し熱海のことを知ってもらう商品を作っていきたいと考えています。しかし、季節感や値段などを考えていくことが課題です。

ところで、レモンは熱海が発祥なのに、なぜ熱海レモンが流行らないのかと考えたところ、農家が少ないこととレモンが作れる土地がないことが問題であるのではないかと考えました。

このような課題から私たちが考えたことは、まず、農家を増やそうと思いました。熱海高校が実際に今やっている多賀小・多賀中にレモンの木を植えているように、熱海の小学校、中学校にレモンの木を植えて少しずつ木を増やしていを商品開発をし、熱海産のレモンを使ったレモン専門店を、熱海に開きたいと考えました。

商品例
・レモンのタルト　・レモンのビール
・レモンのケーキ　など

そこから

熱海を飛び出して全国にも熱海のことを知ってもらいたいので、熱海の人気スイーツ店が協力をして熱海スイーツのアンテナショップ店を全国に出店していきたいと考えました。

熱海スイーツ改革

店舗同士が争いつつ協力したらよいお店が生まれるのではないかと考えました。

熱海を活性化させよう！

「熱海に遊び場を作ろう！！」

【テーマの理由】

熱海には…遊び場がない！！！

まずは、熱海を知るために人が比較的集まりやすいフルーツキング・熱海プリン・BonBonBerryに行ってきました。

〈フルーツキング〉

フルーツキングには、約13種類のフルーツサンドと約13種類のフルーツゼリーを提供しています。
目の前には熱海サンビーチがあり、海を見ながら食べるスイーツは絶品です。

〈熱海プリン〉

熱海プリンは、一つ一つを手作りし、どの年代の方でも楽しめることにこだわり、プリンの固さにまで注意を払っています。なめらかな食感でとても食べやすいです。

〈BonBonBerry〉

BonBonBerryとは、メニューも外観も雰囲気もいちごで溢れた専門店で、お店の中にはフォトスポットがたくさんあります。どの商品もいちごがたくさん使われていて甘くておいしい商品ばかりです。

どの商品も
めっちゃ美味しいし
インスタ映えする！！

【考え】

最近の熱海は、インスタ映えするようなお店にはお客様が多く来店する傾向があることが分かりました。だから、インスタ映えする要素を入れながら地元の子供や学生・大人・観光客まで、みんなが楽しめる場所を提供します。

例えば、お昼はアスレチック・夜はイルミネーションのように一日居ても飽きないようなものです。

〈アスレチック〉

アスレチックは初級編から上級編まで段階を作り、初心者でも楽しめるようにします。

〈イルミネーション〉

・イルミネーションは植物や木のライトアップや様々なオブジェを展示します。

・また、食事ができる場所として、レストランやカフェなどのお店を出します。
カフェでのメニューには、熱海ならではのメニュー（例えばレモンや温泉まんじゅうなどを使ったもの）を出してもらいます。

このような場所を提供することで地元客や観光客が熱海の遊び場として遊んでくれるのではないかと思います。

ビジネス観光類型

対象生徒：２・３年　ビジネス観光類型
指導教員：商業科教員

地域連携実施協力者
熱海伊東法人会・熱海税務署
あいら伊豆農業協同組合
熱海市農業委員会
熱海市秘書広報室・ニコーサービス

取り組みの概要

【１】　起業家育成プロジェクト（租税教育プログラム）

内容：商業科目「ビジネス基礎」において、７年目を迎えるプロジェクトである。熱海伊東法人会による授業を年間２回実施し、税金についての理解を深めつつ、プレゼンテーション能力の育成を目指す。

　過去この授業において、「泉ちゃんゼリー」が誕生している。昨年度は熱海駅ビル「ラスカ」にて４グループに分かれて販売実習を行った。今年度の授業内容もすべて、熱海伊東法人会が教材を作り対応していただく。商業科目「ビジネス基礎」にて対応する。

生徒：２年ビジネス観光類型　　協力企業：熱海税務署、熱海伊東法人会

【２】　この木！何の木！レモンの木プロジェクト

内容：「日本のレモン発祥の地は熱海であった。」をきっかけに、熱海レモンを生徒自らが栽培することで、安心安全な熱海産レモンを全世界に発信する。広報と同時に、小中高と地域が連携し、熱海産レモンの販売、加工品開発及び販売を行う。商業科目「ビジネス基礎」にて対応する。

生徒：２年ビジネス観光類型

協力：JA あいら伊豆　熱海市農業委員会　多賀中学校・多賀小学校

【３】　熱海高校生ホテル＆高校生エージェント

内容：過去３年間実施した「熱海高校生ホテル」と昨年度実施した「熱海高校生エージェント」を統合した実習。今年度は、熱海市内及び初島の観光ガイドと宿泊業を実習する。学校設定科目「観光資源」、商業科目「課題研究」にて対応する。

生徒：３年ビジネス観光類型

協力企業：ニューとみよし、ニコーバス、各観光施設（初島・来宮神社など）

本番　令和２年１２月１５日・１６日（１泊２日）→中止（11 月 25 日決定）

【４】　広報 ATAMI　記事作成

広報 ATAMI の記事制作に向け、本校パソコン部（アクティブ担当）と熱海市経営企画部秘書広報課広報情報室及び美術作家の戸井田様と協働して作成する。

取り組んだこと

【１】　起業家育成プロジェクト（租税教育プログラム）

第１回　　９月１９日（土）　２限　　９：４５～１０：３０

第２回　　１１月　４日（水）　５限　１３：２０～１４：００

【２】　この木！何の木！レモンの木プロジェクト

日時	場所	内容
９月	多賀小学校・多賀中学校	植樹前の地場整備
１０月７日（水）１３：１０～	多賀小学校	レモンの木植樹式
１０月９日（金）１６：００～	多賀中学校	レモンの木植樹式
以降	多賀小学校・多賀中学校	肥料時に生徒・児童と交流
５年後	多賀小学校・多賀中学校	レモン収穫・商品開発
10 月 21 日（水）	西島農園	熱海レモン収穫
10 月 25 日（日）	御殿場青少年交流の家	熱海レモン販売 新商品　熱海レモンスコーン試作販売 千葉県産レモン販売

【３】　熱海高校生ホテル＆高校生エージェント

日時	場所	内容	講師等
９月１１日（金） １４：００～	ニューとみよし	高校生ホテル　決起会	ニューとみよし 富岡　篤美
９月１５日（火） １０：１５～	熱海高校 国際教養室	バスツアーにおけるコロナ対応について	（株）ニコー 関　政則
９月１６日（水） ９：００～	熱海市内 初島	動画撮影・チラシ作成用写真撮影 熱海市内観光地・初島探究	（株）ニコー 関　政則
９月２３日（水） ９：００～	来宮神社	来宮神社のガイド練習	来宮神社　宮司
９月２９日（火） １０：１５～	熱海高校会議室	高校生ホテル実施に向けたマナー指導	鈴木学園 寺澤　拓志
１０月１６日（金） １３：３０～	熱海高校会議室	高校生ホテル実施に向けた実技指導	鈴木学園 寺澤　拓志
１０月１日（木） 以降	ニューとみよし	フロント、レストラン、客室、ドリンク 担当場所ごと２～３人ずつ現地実習	ニューとみよし 富岡　篤美

１１月２０日（金）	熱海梅園 起雲閣	高校生エージェント現地実習	（株）ニコー 関　政則
１１月２５日（水）	ニューとみよし	高校生ホテルリーダー会議 新型コロナウイルス感染拡大防止のため 中止を決定	記者会見準備
１１月２６日（木） ～ １２月１５日（火）	熱海高校	生徒代表によるツアー中止の連絡 現金書留による返金 来宮神社パンフレットと手紙、 熱海夢みぐさ～さくらまんじゅうの発送手続き	生徒
１２月７日（月）	ニューとみよし	高校生ホテル仮想客３組による実施	ニューとみよし 富岡　篤美
１２月１５日（火）	富士 富士宮	ツアーガイド実習のまとめ 他地域と熱海観光資源の相違研究	（株）ニコー 関　政則
１月１４日（木）	熱海市内	令和３年度熱海高校生エージェント観光資源研究	東海バス
２月 10 日（水） 12 時 30 分から 14 時 30 分	ホテルニューアカオ ロイヤルウイング	ウェイター及びテーブルマナー実習 （次年度高校生ホテルに繋げる）	アカオ 従業員
２月１２日（金）	静岡富士山空港 蓬莱橋 島田市博物館 大井川鉄道門出駅	バス添乗員の体験実習 静岡県内の空の玄関分析 自然文化遺産「遺跡」研究 私鉄におけるプロモーション研究 （次年度高校生エージェントに繋げる）	（株）ニコー 関　政則

【４】　広報 ATAMI　記事作成

８月５日（水）１４：００～	熱海高校図書室	作成日程調整
９月１８日（金）１５：３０～	熱海高校図書室	テーマ決め
１０月３０日（金）１５：３０～	熱海高校図書室	取材、原稿作成
１１月１０日（火）１５：３０～	熱海市内	フィールドワーク、原稿収集
１１月２０日（金）１５：３０～	熱海高校図書室	トレース、レイアウト実習
１２月１２日（土）９：００～	熱海市内	取材、フィールドワーク
１２月１７日（木）１３：００～	熱海市内	原稿作成
１２月２２日（火）１３：００～	アトリエ	原稿作成
１月	－	校正・完成
２月 10 日	発行	広報熱海

【１】　起業家育成プロジェクト（租税教育プログラム）

今年度、年２回の連携授業を行い以下のとおりの成果が得られた。

アンケート結果

①　法人会による出張授業は楽しかったですか。　Ｙｅｓ１７人・Ｎｏ５人

②　税金について理解できましたか。　Ｙｅｓ２２人・Ｎｏ０人

③　苦労した点や困った点はありましたか。　Ｙｅｓ　１人・Ｎｏ２１人

④　租税教育以外に法人会の方々と取り組みたかった内容はありますか。

・商品開発を一緒にしてみたい
・実際に選挙や立候補体験をしてみたかった。

⑤　法人会の方にメッセージを書いてください。

・自分たちのために、分かりやすく、説明をしていただきありがとうございました。
・貴重な時間をありがとうございました。税金とは何かを学べました。
・資料を使って説明してもらったので、よく理解できました。
・すばらしい演説でした。
・税金の大切さと重要さを知ることができました。
・３名の立候補者の写真が面白かった。
・将来、選挙の投票に行ってみたいと思いました。

⑥　今回の授業を聞いて将来、選挙に立候補しようと思いますか。

・自分の意見をしっかり言って、相手の意見を聞くことが大切だと思いました。・租税がなくなったらどうなるかということを知った。・自分も大人になるので税金に対して意識を持たないといけないと思った。・税金が 8%から 10%に上がって高いなぁと思っていたけれど、10%分福祉などに役立っているので、脱税しようとか考えないでしっかり納めようと思いました。
・自分の１票が市や県や国の未来を左右するかもしれないと思った。

【２】　この木！何の木！レモンの木プロジェクト

多賀小学校、多賀中学校に植樹を行い継続的にレモンの木を互いに育て、将来果実が実ったとき、小中高が連携を図り商品開発を行う。

【３】　「熱海高校生エージェント&高校生ホテル」

令和２年 12 月 15 日・16 日に実施予定であったが、今年度新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止を決定したため、以下のとおりイレギュラーの対応が教材となった。

１　ツアー申込客に対する中止の電話連絡
２　ツアー申込客に対する返金の対応
３　ツアー申込客に対するお詫び文の郵送
４　実習生徒の発表場の確保

【４】　広報 ATAMI　記事作成

テーマの設定、取材等、熱海市経営企画部秘書広報課広報情報室の皆さまとプロのデザイナーさんの御指導のもと広報誌熱海の紙面を作成した。作成技術と同時に、目的を持ってやり遂げる力や技術技能を身に付けることができた。

今後取り組むべきこと

【１】　起業家育成プロジェクト

内容：商業科目「ビジネス基礎」において、８年目を迎えるプロジェクトである。熱海伊東法人会による授業を年間３回実施し、税金についての理解を深めつつ、プレゼンテーション能力の育成を目指す。

生徒：２年ビジネス観光類型

協力企業：熱海税務署、熱海伊東法人会

2021 年２月 17 日（水）15 時～令和２年度の反省会及び令和３年度の計画検討

【２】　この木？何の木？レモンの木！プロジェクト

内容：「日本のレモン発祥の地は熱海であった。」をきっかけに、熱海レモンを生徒自らが栽培することで、安心安全な熱海産レモンを全世界に発信する。広報と同時に、小中高と地域が連携し、熱海産レモンの販売、加工品開発及び販売を行う。商業科目「ビジネス基礎」にて対応する。

生徒：２・３年ビジネス観光類型

協力：JA あいら伊豆　熱海市農業委員会　生徒が植樹する場所

①　継続的なプロジェクトの展開

ア　ビジネス観光類型を専攻した生徒は、２年次から２年間レモンの苗木を育てる。

イ　育てた苗木を、３年次２学期以降に熱海市内の植樹できる場所を探し、植樹の交渉（営業）を行い、卒業までに植樹計画を立てる。その際、このレモンの木プロジェクトのプレゼンテーション等を行い、理解を得ることが求められる。

ウ　植樹する際は、一人で行うのではなくビジネス観光類型全体で対応する。

②　地域企業・団体と連携を図る

ア　マジオドライバーズスクールと連携
　　レモン祭開催に向けての意見交換及び協力企業の選出

イ　熱海市内の飲食店（カフェ）と協同し、レモン商品の販売

③　今年度までに植樹したレモンの木（本校２本、多賀小学校１本、多賀中学校１本）の継続的な観察

【３】　「熱海高校生エージェント&高校生ホテル」

内容：「熱海高校生ホテル」と「熱海高校生エージェント」を統合した実習。学校設定科目「観光資源」、商業科目「課題研究」にて対応する。

生徒：３年ビジネス観光類型

協力企業：ニューとみよし、ニコーバス、各観光施設（未定）

本番　令和４年１月下旬の金・土曜日実施（案）

①　現地実習を年度当初から分散的かつ継続的に実施する。

②　生徒の積極性を伸ばし、オリジナリティ溢れるサービスの提供ができるようにする。

福 祉 類 型

対象生徒：21・31HR 福祉類型選択者
指導教員：永吉　優里・福田　千恵

地域連携実施協力者
ホテルクエスト清水

取り組みの概要

現在、熱海市の人口は減少傾向が続いている。しかしながら、65 歳以上の高齢者人口は年々増加しており、平成 29 年の９月 30 日現在では、45.8%と熱海市に住んでいる人の約２人に１人は高齢者であるという現状である。熱海市の「高齢者福祉行政の基礎調査」では、高齢者のいる世帯の中でひとり暮らし世帯が最も多いことが示されている。

このような熱海市の現状から地域の見守り支援の必要性や高齢者も参加できる社会づくり、また支援者の育成などが課題であると考えられる。

そこで、本校の福祉類型では、観光産業が「まち」の根幹産業である熱海市において、それらの市の特色を活かし、近隣の福祉施設や企業と連携し、福祉のまちづくりと地域社会の将来を見据えた専門的福祉従事者の育成を目的とした取り組みを行うこととした。

また、Quality of life の観点から、高齢者や障害者などの福祉・医療支援を必要とする人々が健常者と変わらず、充実した人生を楽しむことができるような支援のあり方を模索するため、以下のような取組みを実施した。

昨年度実施していた内容を精選し、今年度は、（１）介護食商品の考案・商品開発、（２）熱海市観光福祉マップの作成を主な取組として実施した。

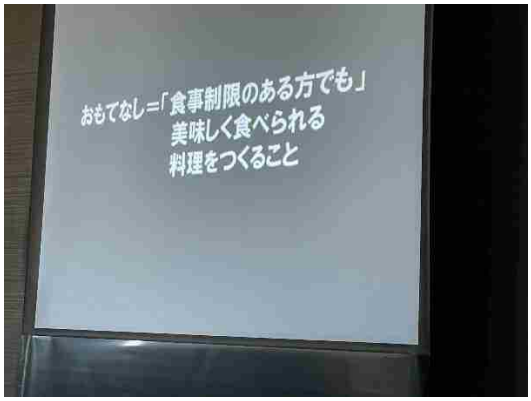
取り組んだこと

（１）介護食商品の考案・商品開発

①介護食メニューの考案

（ｉ）健康食メニューについて知識及び技術の習得（12 月 15 日）

静岡県清水区にある「ホテルクエスト清水」にて提供されている「駿河湾レシピ（健康食）」についてインタビューを行った。「駿河湾レシピ（健康食）」開発のきっかけや調理方法、メニュー考案の工夫方法などをお伺いした。



（ⅱ）メニューの考案（２月 10 日・２月 12 日）

（ⅰ）で得た知識及び技術をもとにメニューの検討を実施した。地元である熱海市や伊豆地域での名産などの情報収集をし、どのようにメニューに取り入れていくか生徒間で話し合いを行ったり、実際に考えたメニューを作ってみたりして、どのような介護食にするのかなどの話し合いを行った。

②高齢者福祉施設にて考案したメニューの提供

新型コロナウイルス感染症の影響により、高齢者施設との連携を十分に行うことができなかったため、実施できていない。来年度に実施予定である。

③アンケート調査

新型コロナウイルス感染症の影響により、高齢者施設との連携を十分に行うことができなかったため、実施できていない。来年度に実施予定である。

④商品開発に向けた取り組み

新型コロナウイルス感染症の影響により、高齢者施設との連携を十分に行うことができなかったため、実施できていない。来年度に実施予定である。

（２）熱海市観光福祉マップの作成

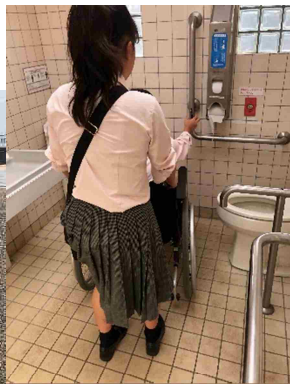
①いきいきサロンマップの完成

新型コロナウイルス感染症の影響により、いきいきサロンにて情報収集を行うことができなかったため、作成できていない。地域の要望としてもいきいきサロンマップ作成の必要性があるため、来年度以降作成予定である。

②地域の福祉マップの作成及び③観光福祉マップの情報取集

（ⅰ）熱海市街及び初島でのフィールドワーク（９月 12 日）

車いすユーザーを招いて、「熱海市街でのバリアフリーの普及について」や「観光福祉マップに記載する内容について」のお話をしていただいた。その学んだ内容を基に、初島において「福祉マップにどのような内容を記載するとよいのか」を生徒自身でバリアフリーの探究活動を行った。

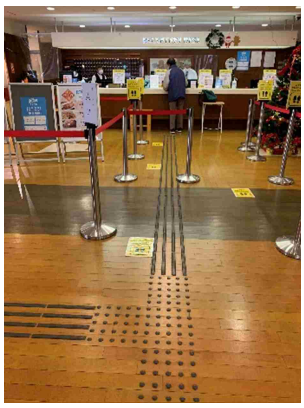
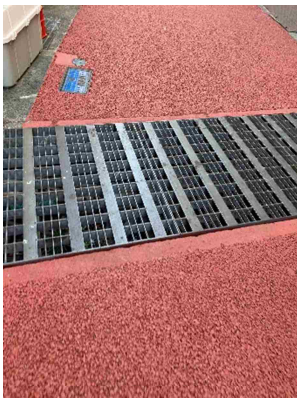


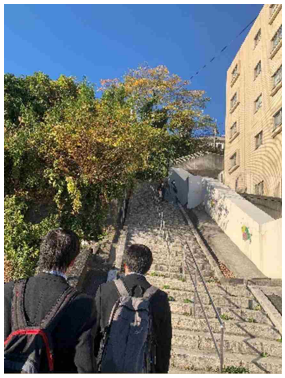
※資料としての撮影のため、撮影時のみマスクを外しています。

（ⅱ）熱海駅周辺における観光福祉マップ作成練習（12 月 7 日）

これまでの活動を通して、観光福祉マップに記載すべき内容を整理するとともに、熱海駅周辺の熱海福祉マップ作成練習を行った。熱海駅から徒歩 30 分圏内を範囲とし、段差、道幅、お店におけるバリアフリー状況などの情報取集を行った。

これらの情報をマップへどのように記載するか、どのような情報をどの範囲で記載するかなどマップ作成方法を検討した。



（ⅲ）来宮駅周辺における観光福祉マップ作成練習（未実施）

（ⅱ）の活動を基に、作成練習範囲を来宮駅に設定し、情報収集及びマップ作成を行う。（ⅱ）及び（ⅲ）の活動を通して、熱海市内の「何を」、「どのように」、「どの視点」でマップを作成するか検討し、マップ作成を行っていく。

④観光福祉マップの作成（未実施）

新型コロナウイルス感染症の影響により、情報収集の十分な時間を確保することができなかったため、作成にまで至らなかった。来年度に実施予定である。

取り組みの成果

今年度、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、主な取り組みである「介護食商品の考案・商品開発」、「熱海市観光福祉マップの作成」の研究活動を十分に行うことができなかった。

そのような中でも、主に２点、次年度以降の研究活動につながる知識・技術を学ぶことができた。

１つは、「利用者視点の重要性」である。

駿河湾レシピができた過程について実際にレシピを考案したシェフから話を聞くことができたことは大変貴重な機会となった。これまでの活動では、栄養面や調理面の技術について学ぶことが多かった。そのため、「地元の食材を使ったメニュー」を考え、それらをどのように調理するかの視点で話し合い等を進めてきた。

しかしながら、ホテルクエスト清水様での研究活動を通して、レシピ考案には、栄養の分野や医学の分野の知識はもちろんのこと、その料理を食べる人がどのようなニーズを

持っているかを知ることの大切さを学ぶことができた。食事制限のない人の視点ではなく、食事制限のある人の視点に立って、何が必要なのか、何を食べたいと思っているのか、どのような場所で、どのような人と食べたいのかなどを考えた上で、レシピの考案を行う必要性を感じることができた。

２つ目は、「マップへ記載する内容の情報整理」である。

熱海駅周辺でフィールドワークを行うことにより、マップに記載しなければならない情報とマップに記載した方が良いと思われる情報、マップに記載しなくても観光するには問題がない情報などを精査する必要性を感じた。特に熱海市内は、坂道が多く、車いすユーザーにとって通るのが大変な道などが多くある。そのような道を記載することによって、車いすユーザーが目的地に行くための経路を考えやすくなる。しかしながら、それらを全て記載することで、情報量が多くなってしまい他の情報を記載するスペースがなくなってしまう点に気づくことができた。

そのため、マップをどの利用者の視点で書くか、どのような情報を記載するのかを絞って活動していくことの大切さを学ぶことができた。

今後取り組むべきこと

来年度以降も（１）介護食商品の考案・商品開発、（２）熱海市観光福祉マップの作成を継続して研究していくこととする。

特に（１）介護食商品の考案・商品開発では、地域の福祉施設等との連携が必要となってくるため、新型コロナウイルス感染症の影響も考えた活動計画を立てていきたい。また、今年度の成果として「利用者の視点」でのメニュー検討を行っていくこととし、福祉施設の利用者へ食事に関するアンケートの実施を新たに計画へ盛り込んでいきたい。これらの活動を取り入れ、来生年度以降は、①福祉施設での利用者へのアンケートの実施、②メニュー考案に当たって必要な様々な分野の知識の習得、③メニューの考案、④福祉施設での提供及びフィードバックを行っていきたいと考えている。

次に（２）熱海市観光福祉マップの作成では、今年度、実施することができなかったいきいきサロンマップの作成に取組んでいくこととする。まずは、地域が「今、求めているマップ」の作成を行うことにより、地域の実情を知るという活動をしていきたい。また、並行して「熱海市観光福祉マップの作成」に向けての情報取集や地域の福祉団体などとも連携しながら進めていきたい。

家 庭 科

対象生徒：「フードデザイン」履修生徒（３年生 13 名）　**地域連携実施協力者**
指導教員：森山　春花　熱海市役所健康づくり課

取り組みの概要

「熱海食育カレンダー」は、昨年から始めて２年目の取り組みになる。取り組みのきっかけは、熱海の恵まれた地域資源を高校生の立場から利活用し、地域に還元できないかと考えたことである。３年生の選択科目である「フードデザイン」を履修する生徒 13 名で熱海、伊豆地域の食材を使用した調理法の開発を行った。高校生ならではの献立を提案することで熱海、伊豆地域の特産品の魅力をより多くの人に発信し、また地域の方々にもその良さを再発見してもらうことを目的とした。

高校生の取り組みを「食育」という視点から地域活性化に繋げるために、レシピ集ではなくカレンダーという形式にし、「熱海食育カレンダー2021」を製作した。カレンダーとして日頃から目に付く場所に掲示してもらうことで、日常的に家庭や学校で子どもと食について話したり、地域の特産品を味わったりするきっかけになるのがねらいである。カレンダーは４月始まりで、毎月季節に合った献立 12 品を写真とともに掲載した。

今年度は食材の紹介に加えて食材の栄養価、料理の栄養成分（エネルギー、塩分）についても記載した。伊豆は高齢化が進んでいることに加え、塩分の摂取量が多い地域でもある。製作したカレンダーは地域の小中学校、県内の高校、熱海市役所健康づくり課に協力していただき地元の食育推進団体などへ配布を行った。さらに、前年度追加希望があったことから、学校ホームページから無料でダウンロードできるようにした。

取り組んだこと

１学期

◇熱海や伊豆地域の特産品の調べ学習

◇調理実習や座学を通して、基本的な調理技術・知識の育成

◇熱海や伊豆地域の特産物を利用した献立作成

・レシピ集ではなくカレンダーとするために、13 名の生徒を４つの班に分け、１班につき３ヵ月分の献立を作成。

・料理本やインターネットなどを参考にし、季節や行事に合う料理を検討。

◇献立で使用した地元食材の栄養価についての調べ学習

２学期

◇作成した献立の試作

・作成した献立通りに調理し、試食を行う。

・味付けや調理工程、分量などが適切かを確認し、再検討。

◇カレンダーの入力作業

・試作を通しての最終的なレシピ、食材の紹介と栄養、食や生活に関する記念日を調べて入力。

◇カレンダー用写真撮影

・カレンダーに載せる最終的な献立を調理し、写真撮影。

・盛り付けやテーブルコーディネートを考える。

◇カレンダーの入力作業、栄養計算

・料理の栄養価の入力、最終確認。

取り組みの成果

カレンダー製作に当たり、生徒は熱海や伊豆の特産品を調べることからスタートした。献立作成を行う前は「献立に使用できる食材に制限があるから難しい」と言っていた生徒も、食材を調べていくうちに海のものだけでなく山のものもあり、「これも熱海や伊豆の特産品だったんだ」と気づく生徒が多かった。そして、なぜその食材が特産品となっているのか、どのような栄養があるのかなどを調べるうちに地元の食の豊かさに気づき、興味を持った様子であった。「自分で考えて調理した献立が美味しくて自宅でも作ってみました」と報告してくれる生徒もいた。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で十分な実習機会を設けることができず、例年以上に生徒の調理技術に差があった。しかし各班に家庭での調理経験が多い生徒がおり、その生徒を中心に協力して献立作成や調理を行う姿が見られた。また、材料の分量を調べたり、分かりやすい文章を考えたり、盛り付けやテーブルコーディネートを考えたりと様々な作業を行う中で自然と役割分担が生まれ、それぞれの担当を責任持って取り組もうとする姿が多く見られた。特に今年度は履修生徒数の都合で１人１ヵ月を担当する形となったため、自分の担当する月に対して強い責任感が芽生えたようである。中には授業時間内に打ち込み作業が終わらず、「自分の担当だから」と言って一人残って黙々と作業する生徒も見られた。

生徒はカレンダー作成のために、「献立作成」「試作」「献立の修正」「最終調理・撮影」といった流れで取り組んだが、これは P（計画）D（実行）C（評価）A（改善）に当てはまる。試作を通して「思ったより水の分量が少ない」「盛り付けに失敗してしまった」などの気づきを得て、改善に繋げることができた。中には試作を行った後で献立を大きく変更した班もあった。食材調べなど振出しに戻っての作業となったが、最終的により良くなった料理の出来栄えを見て「頑張ってよかった」と話す姿が印象的だった。様々な気づきを得て修正をしながら取り組むことでより良いものを生み出せるという経験を、今回のカレンダー製作を通して得ることができたと考える。

今後取り組むべきこと

前年度の反省を踏まえ、今年度は献立の栄養価や食材に含まれる栄養の記載、学校ホームページからの無料ダウンロードを行った。しかし、地元企業とのコラボや調理動画の撮影（QR コードを開くとその動画が見られるようにする）などには至らなかったため、次年度以降の反省点としたい。

また、配布先の検討も次年度の課題の１つである。今年度は熱海市内の小中学校や伊東市の中学校、県内の高等学校、熱海市の食育団体などに配布予定であるが、地元に還元する目的を考えると、地元企業や農協、スーパーマーケットへの配布を視野に入れたい。これを実現するためには、地元企業や熱海市役所や商工会議所との連携が不可欠である。総合学習などで連携してきたことを生かし、さらなる改善と充実を目指したい。

パソコン部

対象生徒：パソコン部
指導教員：パソコン部顧問

地域連携実施協力者
熱海高校管内の企業　熱海市役所

取り組みの概要

これまで、主にタイピング練習と情報関係資格取得に向けての演習を行っていたが、パソコン室という閉鎖的な空間で静かに活動するだけでなく、時には外に出て様々な生活体験をさせることで学校や地域に寄与する態度を育て、自己肯定感や自己有用感を醸成したいたいと顧問は常々考えていた。

パソコンを中心とした活動を継続しつつも、本校観光ビジネスコース生徒が開発したゼリー・まんじゅうなどの販売活動を通した熱海高校プロモーションや、地元食材（漁業・農業）を利用した新商品開発とコンテストへの参加や販売、部員の居住する熱海・伊東・湯河原・函南などの地域研究等、幅広い活動をしている。

取り組んだこと

【新商品開発】

パン樹久遠と協働しての商品開発（純情熱海檸檬スコーン）

2019 年 12 月～

2020 年　１月　レモンラスク試作品作り（本校調理室・本校生徒）
久遠訪問　試作品持参　商品開発についての打合せ
２月　久遠訪問　プロジェクトリーダー（４人）社長と打合せ
久遠来校　試作品①（熱海レモンスコーン）久遠案を部員で試食
感想・意見の集約
熱海産レモン収穫・はちみつ漬け作製・生徒案提示
久遠来校　試作品②（熱海レモン輪切り付きスコーン・仮パッケージ入）

～コロナ渦でプロジェクト中断～

９月　久遠訪問　プロジェクトグループ（7 人）社長と打合せ
10 月　熱海檸檬スコーン最終試作品納品・のぼり旗図案検討
のぼり旗完成納品　久遠店頭にてプレス対応
国立中央青少年交流の家において検証販売し 50 分で 100 個完売
久遠訪問　検証販売調査結果持参　　今後改良を重ね完成を目指す

【広報ＡＴＡＭＩ記事作成】

熱海市経営企画部秘書広報課情報室及び、美術作家の戸井田雄氏・イラストレーターの戸井田明日香氏と協働して作成

2020 年 ８月　作成日程調整　　９月　テーマ検討　　10 月　テーマ決定
11 月　フィールドワーク　トレース・レイアウト実習
12 月　取材・フィールドワーク　原稿作成
2021 年 １月　校正・完成　　２月号に掲載

武山さん（中央）と「熱っちゃん♡」を描いたのぼり旗とスコーンを手にする生徒たち＝熱海市田原本町

熱海高生

熱海レモンのスコーン考案

生地にマーマレード

パン樹 久遠が協力

試作段階から好評

「どれだけ売れるか楽しみ」

熱海高（石田金世校長）生徒が熱海レモンをPRするため、新たにレモンのスコーンを考案した。田原本町、仲見世通りパン店「パン樹 久遠」の協力で製造し「純情熱海檸檬（れもん）」と名付けた。シールやのぼり旗も作り、21日、久遠で本格的に販売を開始した。

考案はパソコン部を中心に行っているPRプロジェクトの一環。生地にレモンマーマレードを練り込んであり、久遠の武山陽司社長は「生徒の意見を基に何度か改良し、完成した。試作段階から店で販売したが、出せば売れた」と話す。

21日はパソコン部の生徒8人がレモンののぼり旗を手に店を訪れた。旗には新たに作ったプロジェクトのキャラクター「熱っちゃん♡」が描かれている。

リーダーの渋谷幸生さん（2年）は「レモン味がしっかりする。どれだけ売れるか楽しみ」と語った。

広報あたみ2月号

熱海高生が共同製作

身近な坂取材し特集

広報あたみ2月号

熱海高パソコン部と共同企画

熱海高パソコン部とにスポットを当てた。熱海市がコラボ（共同）し製作した「広報あたみ2月号」がこのほど発刊された。「坂」をテーマに5ページにわたる特集を組み、部員が企画、執筆、イラスト作成に当たった。16日には市広報情報室の職員が同校を訪れ、300部を部員に届けた。

特集は「『坂 坂』～坂から始まる私たちの見つけた熱海／西熱海特集～」と題して、身近な存在の「坂」を取材した。市は地元高校生に、町を知り、将来熱海を支える人材になってもらおうと企画した。昨年の9月から同部のプロジェクトグループ8人と広報あたみ製作を委託する混流温泉とともに、若い世代にも読んでもらえる広報紙を目指し、製作を進めてきた。

生徒らは届いた広報紙をわくわくした表情で広げ、作成時のことを振り返った。

プロジェクトリーダーの渋谷幸生君（2年）は「かわいいデザインでターゲットに合った広報紙ができた。坂をまとめたことで坂に対するイメージも変わった。卒業生にも手に取ってもらいたい」と話した。

完成した広報あたみを手にするパソコン部の生徒＝熱海市の熱海高

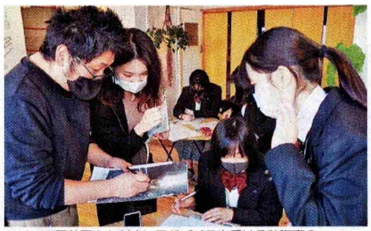
“生徒目線”の特集作製へ

表紙含め5ページ

熱海高パソコン部と共同企画

熱海市役所広報情報室は熱海高とのコラボ（共同）企画「熱海高校生と一緒につくる広報あたみ」を進めている。同校パソコン部と共同で、広報あたみ2月号の表紙を含めた特集5ページを作製する初の試み。22日は港町のコワーキングスペース「ナギサウラ」で最後のまとめを行った。

市職員が幅広く活動する熱海高に注目し、“高校生目線”で掲載内容を考えようと企画した。サポートにナギサウラの店主で美術作家の戸井田雄さん、デザイナーで妻の明日香さんを招き、8月から話し合いを進めてきた。街の特徴について、生徒が実際に取材した内容をまとめ特集するという。



戸井田さん（左）にアドバイスを受ける熱海高の生徒＝熱海市港町のナギサウラ

戸井田さんは初めに「市民のみんながどう思うか客観的に考えながら取り組んでほしい」と呼び掛けた。生徒は各ページの担当に分かれ、表紙デザインや文章などをまとめた。戸井田さんからアドバイスを受けたり、相談したりする生徒もいた。

熱海高プロジェクトリーダーの渋谷幸生さん（2年）は「市民が知らない熱海を知ってもらえるような広報にしたい」と意気込んだ。

取り組みの成果

（1）生徒の自己肯定感・自己有用感の向上

中学校時代は二番手三番手で、あまり周りから認められなかった生徒が、様々な生活体験をしたことで、達成感や成就感を得る経験を積むことができた。部員たちで育てた農作物の収穫時や、販売実習での完売時の表情を見るにつけ確実に育っていることを実感した。

（2）コミュニケーション能力の向上

様々な年齢層や各種業界のエキスパートとの交流で、それぞれの立場に応じたコミュニケーションの取り方が上達したと感じた。特に販売実習では、お客様と接する中で自然に身に付いたものも多く、自信につながった。児童や幼児には目線の高さを合わせて平易な言葉で話したり、お年寄りには大きな声でゆっくりと対応したり、専門家の話にはメモを取って質問を繰り返すなど学校以外の現場で身に付いたものが多い。

（3）産・官・学の連携

今年度は総合的な探求の時間でお世話になっている企業や販売実習で知り合った企業主、熱海市役所経営企画部秘書広報課と連携できた。企業の方々からは、「今後も高校生と協働したい」、「もっと新しい取組を考えたい」などといった御意見をいただいた。生徒も「視野が広がった」、「プロはすごい」、「もっといろいろな活動をしたい」など肯定的な感想ばかりであった。

今後取り組むべきこと

地元パン工房と連携し、新商品の開発と継続的な販売を行ったり、地元水産会社と連携し、ひもの作りと販売、未利用魚の活用と商品開発を考えたりする。伊豆地区の農家や生徒の保護者と連携し、漬物作りやジャム作りや地域住民対象のパソコン教室など夢は膨らむ。

本部活動は、本校が研究指定校になったことにより、成果を意識して活動しているわけではない。部員が部活動方針を理解し、顧問と対話をしながら活動をより活発にしていきたいと考えている。

報 道 部

対象生徒：報道部部員２年生７名、１年生７名
指導教員：顧問　奥山ゆう子、佐藤恵美子

地域連携実施協力者
三島信用金庫　ほか

取り組みの概要

報道部は「学校応援団」をモットーに、本校生徒の活躍や身近なところでの魅力の発見に努め、新聞を作成している。校内新聞「熱高ニュース」としては校内印刷版を月 1 回、外部印刷業者依頼発行新聞は年 1 回を目安に活動している。さらに高校生と地域をつなぐことを目指し、高校に関わる校外の情報についても記事に盛り込む活動を始めている。

また、地元金融機関、他校新聞部との協働による紙面作成も行っている。これは三島信用金庫が地域創生事業の一環として平成 29 年３月に「まち・ひと・しごと新聞」を創刊したことに端を発している。この事業は地元高校生が地元企業の取材と新聞制作を行うことで、高校生に地域への関心を高めてもらうということを目的としている。

本校は平成 29 年度（平成 30 年３月発行）版より参加し、令和２年度で４回目の参加となる。地元で活躍している優良企業を訪問し、高校生目線での取材を行うことで、地域に根差した魅力ある企業の紹介とともに、地域資源の再確認を促すことにつながっている。

取り組んだこと

１　通常の部活動における「地域とのつながり」

（１）過年度の活動

令和元年度は「熱高ニュース」第 93 号４面で「熱海を知る！　今、熱海は…」と題し、熱海市街に取材に出かけ、地域の様子についての紙面を作成した（令和２年１月 31 日発行）。年間の観光客数が３年連続 300 万人を超え、「熱海の奇跡」と呼ばれる地域活性の回復傾向を見せている熱海市街の実際の様子について取材し、紙面にして高校生に配布することで、地域への関心を持ってもらおうという狙いで実施した。取材先の選定については生徒自身が行った。

（２）本年度の取り組み

本年度はコロナ禍のため学校は５月末まで休校になり活動停止であった。そのため、２学期からの活動であった。しかし、郊外の取材は制限され、例年発行している「熱高ニュース」は校内の部活動の取材をして３号発行した。また校内マラソン大会についても発行予定である。

２　三島信用金庫発行「まち・ひと・しごと新聞」

本校報道部が三島信用金庫の「まち・ひと・しごと新聞」事業に参加したのは、平成 29 年度第２号からである。新聞作成担当高校については、平成 28 年度は韮山高校写真報道部が単体で取り組み、平成 29 年度からは本校報道部および日本大学三島高校新聞部、平成 30 年度からは沼津東高校新聞部が加わり、４校で紙面を分担し制作している。

制作のスケジュールは（１）９月中旬に三島信用金庫からの趣旨説明、参画依頼、（２）10 月初旬に取材企業の選定と企業への取材依頼、（３）10 月末に高校と取材企業の日程調整、（４）12 月末までに企業取材、記事作成、（５）１月初旬までに取材企業による記事確認・最終データ入稿、（６）２月末に印刷、３月１日発行、各校の卒業式で配布となっている。企業の選定は、複数社に候補を絞るところまでは三島信用金庫側が、最終的に選考、決定する過程で教員と生徒が関わる形態である。

平成 29 年度第２号では、土屋優行静岡県副知事を交えての地域活性化に関する高校生座談会に参加・取材し、記事を作成した。あわせて、熱海にある空調設備の設置、メンテナンスを行う企業「平和エアテック」を取材し、観光産業を「裏方」として支える企業の存在をクローズアップした。

平成 30 年度第３号では地元熱海の企業２社を取材した。熱海をはじめとする伊豆東海岸で港湾土木、護岸建設をしている「青木建設」と、宿泊業の「秀花園　湯の花膳」を訪問し紙面作成した。

令和元年度第４号では、伊東に本社を置く運輸業の「伊豆急行株式会社」、熱海を代表するホテル「ホテルニューアカオ」を取材した。本年度令和２年度第５号では、地域密着の新聞社「伊豆新聞本社」と熱海高校近くのホテル「ニューとみよし」を取材した。「伊豆新聞本社」では、新聞を作る心構えや新聞社としての垣根を超えた地元に対する愛を感じた。ホテル「ニューとみよし」ではコロナ禍の混乱の中での取り組みを学んだ。どちらの取材も新入部員にとっては貴重な体験となった。

伊豆新聞本社
新聞を作る企業として

ただ最高のホテルとして
味と湯の宿　ニューとみよし

記者として

地域と共に

編集後記

今後について

取り組みの成果

本年度はコロナ禍のため活動が大幅に制限されたが、校内新聞では事実を正確に伝えること客観性に基づいて新聞を作ることを実感していた。

一企業での取材では、地域における企業の役割や、地域への貢献についての思いを社長や社員から直接聞くことで、生徒は仕事を通しての自己実現と地域貢献について考えるようになった。

より細かい点を言えば、大人に対する質問の仕方、準備の在り方、メモの取り方から名刺の受け取り方まで、地域に出向き社会人と接することで学校での学びでは実現しにくい社会性の涵養につながる学びの機会があった。ポジティブに生きるための思考方法を語ってくれる経営者もおり、単なる「お仕事紹介」ではない多様な学びの機会となっている。

今後取り組むべきこと

本校生徒はコミュニケーションを不得意とする生徒が多い印象がある。報道部部員も決して社交的とは言えないが、だからといって相手に対しての配慮より、生徒を社会に出す場面から遠ざけてしまうのは、却って問題であると考える。コミュニケーションが苦手であるからこそ、より実践・実施の機会を増やす。そうすることで少しずつでも改善していくことはある。応対してくださる社会人側にもご理解をいただき、高校生を「地域とともに育てる」意識を醸成していきたい。

そのためにも、地域と結びついた活動の領域を広げ、機会を増やしていく必要があると考える。今後は伊東市域の高校、賀茂郡の高校などより伊豆の狭いエリアでの魅力発見への取り組みの協同化とともに、広い目から見た地域を意識できるような視点を変えた地域との取り組みを作り、生徒への学びの機会を設けていきたい。

吹 奏 楽 部

対象生徒：吹奏楽部生徒　　**地域連携実施協力者**　あいら伊豆農業協同組合
指導教員：渡邉太一　小見山秀彦

取り組みの概要

年度当初は例年と同様、近隣の病院や介護施設から依頼が来ていたが、新型コロナウイルス感染防止のために延期となってしまっている。そんな中、近隣の市場から店内での吹奏楽部演奏ＣＤ再生のお話を頂いた。

取り組んだこと

令和２年 11 月 28 日(土)、JA あいら伊豆いで湯っこ市場(伊東市玖須美元和田 715-26)店内にて、予め CD に録音した吹奏楽部の演奏を流して頂いた。曲目は、「Paradise Has NO BORDER」「胸キュンメドレー(惑星ループ、千本桜、残酷な天使のテーゼ)」「情熱大陸」「Love so sweet」の４曲であった。

1/9(土)～1/11(月)も、同じ CD を店内で再生して頂いた。

取り組みの成果

（１）緊張感ある本番の確保

新型コロナウイルスのために本番が少ない１年間だったので、録音という緊張感ある演奏機会が得られたのは、貴重であった。

（２）活動の宣伝

生徒自らが右のような宣伝ポスターを作成し、会場に掲示した。ポスターを見たお客様から、今後演奏依頼が来ることに期待したい。

今後取り組むべきこと

コロナウイルスによる活動の制約は、まだまだ続きそうである。生徒の方から Youtube や Instagram を用いたライブの提案があったので、著作権や肖像権の問題に十分配慮しつつ検討し、より地域に根差した活動を目指す。

ボランティア部

対象生徒：ボランティア部員　　**地域連携実施協力者**
指導教員：永吉　優里、猪俣　汐帆

取り組みの概要

普段は週３回を活動日とし、校内外の清掃活動、手話歌の練習を行っている。これまでは、休日に地域の福祉施設を中心にボランティア活動を行っていた。地域でのボランティア活動では、継続的な関係を築くことを意識し、地域に貢献できるような活動を行うことを目的としている。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、地域でのボランティア活動を行うことができなかったため、手話歌の練習及びこれまで交流のある福祉施設への寒中見舞いの送付を行った。

取り組んだこと

（１）手話歌

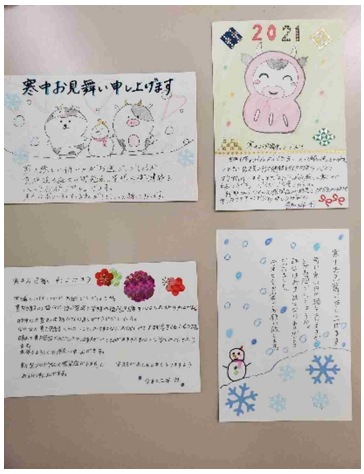
これまでの活動として、福祉施設などでレクリエーションの一環として手話歌を披露していた。今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、福祉施設に出向くことができなかったため、来年度以降に手話歌を披露できるようレパートリーを増やすよう練習に励んだ。

（２）寒中見舞いの作成

今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、これまでボランティア活動をさせていただいていた福祉施設で活動を行うことができなかった。

そのため、「今、できること」を生徒たちと検討し、「寒中見舞い」の作成と福祉施設への送付を実施した。

初めての試みであったため、「寒中見舞い」の書き方など学ぶことの多い取り組みであった。



取り組みの成果

（１）手話歌

今年度は、校内の文化祭での披露のみとなったため、取り組みにおける達成感や充実感を多くは感じることができなかった。しかしながら、今後も継続し、福祉施設や様々なイベントでの披露を検討している。

（２）寒中見舞いの作成

初めての取組ではあったが、送付した施設から感謝の言葉をいただいたところもあったため、このような日本文化でもある「手紙」のやりとりを継続できるよう検討していきたい。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、これまでの活動を十分に行うことができなかった。このことから新しい生活様式の中で、どのようにボランティア活動を取り組んだら良いのか、これまでの交流をどのようにして続けていけば良いのかなどを生徒たちと話し合うことができたことは一つの成果であった。

今後取り組むべきこと

新しい生活様式の中、スタイルは変わっていくかもしれないがボランティア活動は、地域の中では必要不可欠なものであると考えられる。そのため、このような社会状況の中で柔軟に対応ができたり、今できることを考えたりすることができる力を育てていく必要性も感じた。

来年度以降は、これまで交流のある福祉施設とオンラインでの交流や手紙での交流など新たな活動にも取り組んでいきたいと考えている。

エイサー部

対象生徒：エイサー部部員
指導教員：山田哲久　森晴菜

地域連携実施協力者
介護施設様、各イベント実行委員会様

取り組みの概要

私たちエイサー部は結成 14 年目となり、３年生７名、２年生３名、１年生２名の計 12 名で活動をした。平日は体操・体幹トレーニング・基本打ち・パート練習・声出し練習・通し練習などを行っている。休日は例年であれば演舞依頼をいただいた場所に赴いて演舞を披露し、地元に限らず県外にも足を運び、計 40 回を超える発表の場があるが、今年度は新型コロナウイルスの影響で演舞を披露することがほとんどできなかった。また、校内での活動も制限され、対策を十分にとったうえで部活動に励んだ。

演舞の指導については、上級生が下級生を指導したり、パートの枠を越えてお互いに教えあいをしたりと、生徒同士でコミュニケーションを取りながら技術向上を図っている。さらに、元気な声を出して盛り上げることや、笑顔で場を和ませるといった高校生の持っているエネルギーを見て下さる方に伝えることができるよう、練習内容も工夫をしている。

エイサーを踊る自分たちがまず楽しみ、さらに見て下さる方もみんなで楽しめるような演舞を披露できるよう、これからも練習に励んでいきたい。

取り組んだこと

2020. 11. 19　桃陵祭校内発表
2020. 12. 13　保護者前演舞発表会
2020. 12. 20　静岡県高等学校文化連盟郷土芸能専門部第 25 回文化祭

取り組みの成果

(1)演舞ができる喜びの再認識

数少ない演舞機会であったからこそ、改めて人前で演舞をできる喜びや、会場にいる全員で作品を作り上げることの楽しさを再認識できた。自然と生徒から笑顔が見られ、見ている方々へ本校生徒の熱い思いを届けることができた。

(2)考えて行動する力

演舞ができないからこそ、基本的な動作の見直しや、隊形移動も例年とは違うものにしようとする工夫が見られた。練習に対するモチベーションがあがらないことが心配されたが、技術向上に向けて、月１回のテストを行うなど、緊張感を持続した活動をすることができた。

今後取り組むべきこと

今後もコロナ禍が続くことが想定される。直接演舞を披露することができなくても、日ごろの活動の様子や生徒のメッセージなどを添えた DVD を作成することで、少しでも元気を届けられるようにしていきたい。様々な形で地域とつながりをもてるような部活動を継続していく。

キャリアカフェ

対象生徒：全校生徒
指導教員：進路課職員

地域連携実施協力者
熱海高校管内・県内の企業様

取り組みの概要

昨年度から始まったこのキャリアカフェは、３年生が求人票の受付を控えた６月に、熱海市の商工会議所と連携し、生徒と社会人が仕事について語り合い、キャリア意識の向上を図る目的で実施している。３年生のみならず、コース選択を控えた１年生や、就職準備をしている２年生にも参加を呼びかけ、全校生徒誰でも参加を可能にした。

これを機に、進路先の選択肢としての幅を広げたり、進路の最終的な方向性を絞る機会を与えたり、まだ進路希望がはっきり定まっていない生徒に考える機会を与えたりするなどの効果を期待している。また、社会人との関わりが希薄な生徒達が社会人と話す機会を与えられることで、社交性を身に付ける場を用意したいと考えている。

取り組んだこと

従来の進路ガイダンスのような堅苦しい雰囲気ではなく、「キャリアカフェ」という名前が示すように飲み物を片手に気軽に社会人の話を聞く機会を設け、社会人のやりがいや勤労観を自由な雰囲気の中で感じられるようにという趣旨のもと 2019 年度より始まった「キャリアカフェ」であるが、今年はコロナ禍の影響で、飲み物を提供しない形での開催となった。

令和２年度は、感染症予防措置のため、１回のみ開催し、以下の企業をお呼びして、仕事内容等について紹介していただいた。

開催日：令和２年６月８日（金）

場所：熱海高校　各教室

参加企業：株式会社　三ツ星工業
あいら伊豆農業協同組合
株式会社　ウェックス
株式会社　エヌティー倶楽部　ニューとみよし
アイリスオーヤマ　株式会社
伊豆高原　ゆうゆうの里
マジオドライバーズスクール熱海

取り組みの成果

３年生を中心に、１・２年生も企業様の生の声を聞くことで進路意識が高まった。「働く」ということに関して漠然と持っていたイメージが、具体的に自分の適性や能力について改めて考えることができたようである。生徒の中には、積極的に質問をして、働くことへのやりがいや、大変なことなどを聞く姿が見られ、コミュニケーション能力の向上の一助になった。企業側からも、高校生に話をすることで、地元企業のメリットや、企業理念・仕事内容について伝える場になったようで、学校と地域との繋がりが更に深まったと感じられる。

今後取り組むべきこと

令和元年度より始めた「キャリアカフェ」であるが、生徒、企業共に好評であったため、来年度以降も継続して実施していきたい。今年度は、コロナ禍の影響で、飲食なしの開催となってしまったため、来年度以降は、より和やかな雰囲気のもと、開催したい。また、話を聞く前の段階から、その会社について調べ、質問を考えたことで有意義な時間となったため、事前指導は今後も継続したい。

地元企業ガイダンス

対象生徒：全校生徒
指導教員：進路課職員

地域連携実施協力者
熱海市商工会議所、地元企業様

取り組みの概要

コロナ禍の影響で、今年度は熱海高校管内（三島・伊東ハローワーク管内）求人数が 73 件から 59 件に激減した。選択する職種が例年よりも限られる中、7 月 1 日の求人票公開の日を迎え、気持ちも新たに 3 年生は自分の希望する職種についてより多くの情報を得たい状況であった。そのような中、7 月 21 日に熱海市商工会議所主催のもと、地元企業ガイダンスが開催され、3 年生にとっては緊張した空気の中、積極的に情報を集める良い機会となった。

取り組んだこと

求人票公開を受け、7 月 1 日以前では質問できなかったことについても具体的に質問することができ、生徒達にとっては、非常に良い情報収集の場となった。3 年生のみならず、１・２年生も参加することができ、興味のある企業についてより多くの知識を得ることができた。

【生徒からの質問例】
・どのような仕事ですか？
・仕事をしていて良い仕事だと感じるのはどんな時ですか？
・仕事について大変な点は何ですか？
・入社試験はどのような形で行われますか？
・面接で重視するポイントを教えてください。
・会社見学はできますか？
・入社できた場合に研修はありますか？
　またそれはいつ頃ですか？
・ボーナスはありますか？
・住み込みはできますか？
・勤務条件について教えてください。（勤務時間、休日、シフト、残業、給料、昇給）
・家が少し離れていますが、車で通勤できますか？（通勤についての詳細）
・熱海高校のＯＢ、ＯＧはいらっしゃいますか？

【参加企業】
（株）徳造丸
（株）平和エアテック
（株）三ツ星工業
あいら伊豆農業協同組合
（株）ウェックス
（株）エヌティー倶楽部
(株)マジオネット熱海
（株）アヤハレークサイドホテル
（株）アイビックス
安田製菓（株）
（株）アシベ商事

取り組みの成果

【事後アンケートより】

就職理由集計結果
①家庭の事情　　１１
②夢の実現の為　　１０
③お金の為　　２１
④やりがいを感じたい　１１
⑤なんとなく　　２
⑥早く自立したいから　　１４
⑦その他　　４
・安定した暮らしをするため
・自分の興味のある仕事でやりがいを感じることができる仕事なら、強くやりたいと思うから
・自分が行くことが出来る大学では入ることはできても就活がとても厳しいだろうから
・家族の負担を少なくしたいから

今後取り組むべきこと

地元熱海に就職する生徒の数を増やすことが課題となる。そのためには、地元の企業を知ってもらうこと。良さを感じてもらうこと。今後も地元企業ガイダンスを継続していくことで、生徒の職業意識を高めていきたい。

インターンシップ

対象生徒：２年生就職希望者
指導教員：２年部職員

地域連携実施協力者
地域企業者様

取り組みの概要

就職希望者を中心に、２年生ではインターンシップを行った。今年度は新型コロナウイルスの影響もあり、説明会に参加することも含め、昨年度本校に求人を送っていただいた企業を中心に、生徒達自ら実習先を選び、打ち合わせをして実習を行った。

取り組んだこと

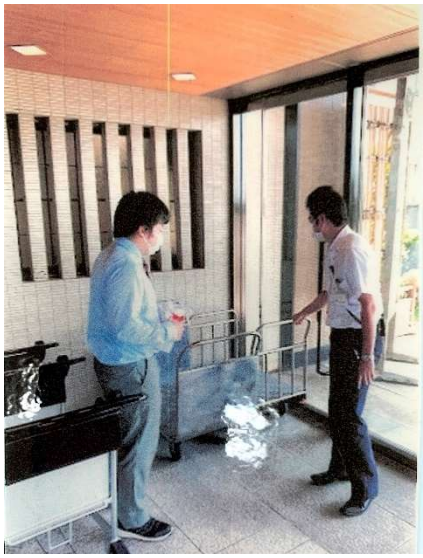
６月　生徒へのガイダンス、実習先の希望調査
７月　実習先の決定及び調整、教員による実習先への受け入れ可否についての許可取り
　　生徒による、実習先との電話による打ち合わせ
８月　インターンシップ本番
９月　お礼状指導、お礼状の送付

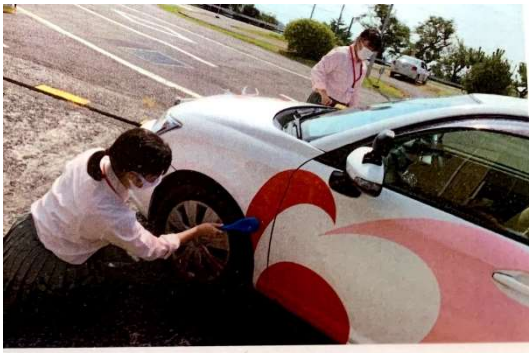
取り組みの成果

(1)生徒が、コミュニケーション能力の重要性を意識することができた

生徒による、実習先との電話による打ち合わせは、当日の持ち物や、集合場所・時間、注意事項などを直接企業の方に伺った。丁寧な口調を心掛け、メモをして聞き取るなど、電話応対の実践的な場となった。

また、実際にインターンシップを行う中で、企業の方が、お客様にどのような対応をしているのかを見たり、介護施設で利用者様にどのような声掛けをするかなどを聞いたりして、コミュニケーション能力の大切さを実感した生徒がいた。





(2) 生徒が、進路に対する意識を高めることができた

インターンシップを経験したり、説明を聞いたりするなど、積極的に取り組むことができた。実習後に行ったアンケートでは、「施設について知ることができ、他の場所にも施設があるとわかったので、将来のことが考えられた。資格取得などに協力してくれることがわかったから、夢に近づきやすい場なのかなとも思えた。」、「働くことの厳しさを知りました。暑い中寒い中、毎日働いていると思うとすごいなと強く感じました。」など、前向きな意見が多数出た。また、「今回のインターンシップが、将来の自分の進路決定に役立つと思いますか。」という問いに対して、「役に立つ」と回答した生徒が９割を超えたため、生徒の満足度は非常に高いと考える。

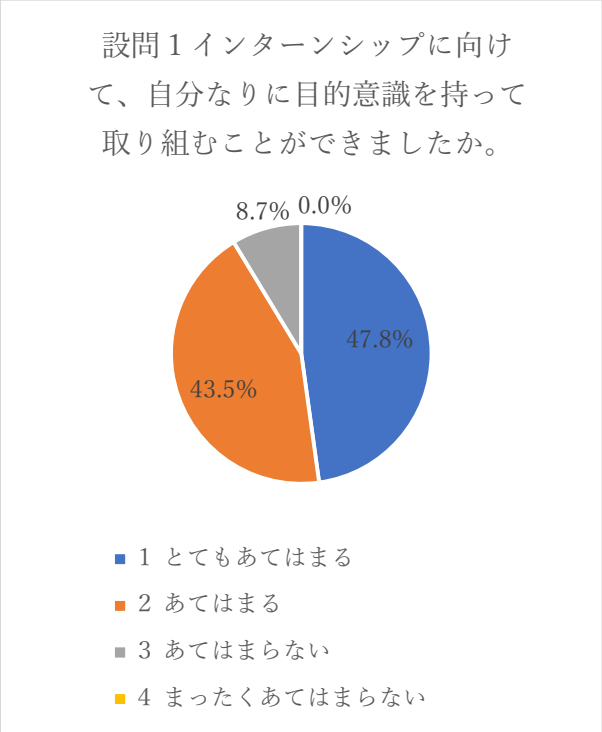
今後取り組むべきこと

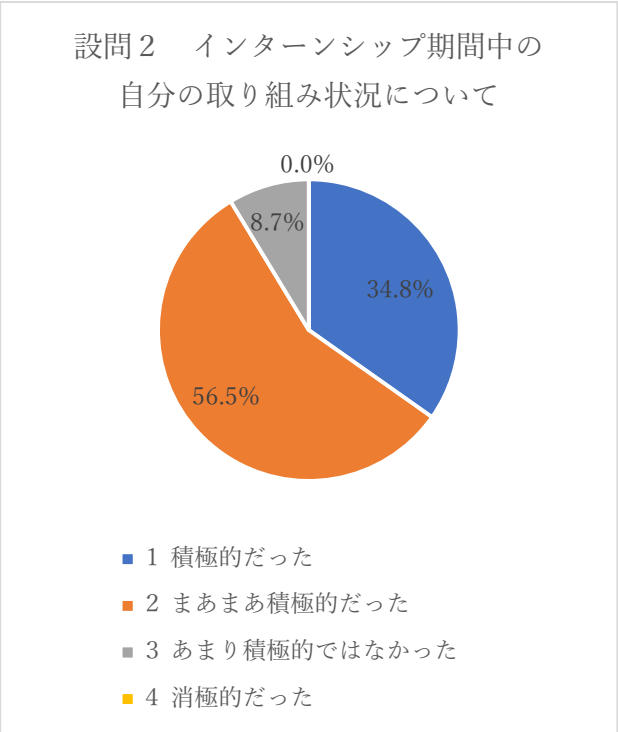
今年度のインターンシップを通して、次年度以降に向けて行うことは２点あると考える。

１つ目は、インターンシップを通じて、コミュニケーション能力が大切だと学んだ生徒が数多くいた。今後も、社会人として必要なコミュニケーション能力を日常的に指導していく必要があると考える。

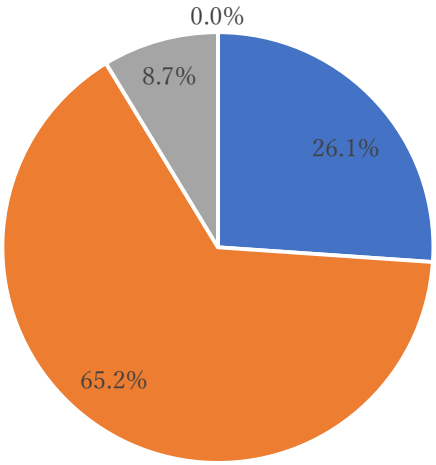
２つ目は、今年度は、コロナウイルスの影響により、インターンシップを受け入れていただいた企業が例年より少なかった。企業によっては、体験前１～２週間の行動記録や健康観察表の提示なども受け入れる条件となっていたため、来年度以降も情勢を見ながら、インターンシップの実施の仕方を判断する必要があると考える。

生徒による事後アンケート



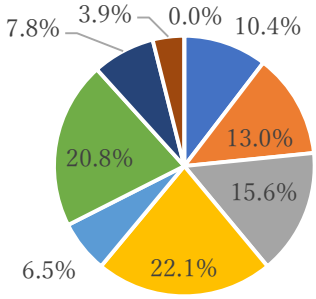


設問３　インターンシップを通して、自分は成長できたと思いますか。



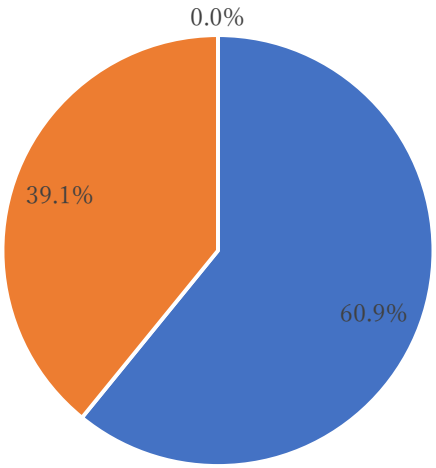
- 1 とてもあてはまる
- 2 あてはまる
- 3 あてはまらない
- 4 まったくあてはまらない

設問４　インターンシップを通して、身についた、学んだと思うことは何ですか。（複数選択可）



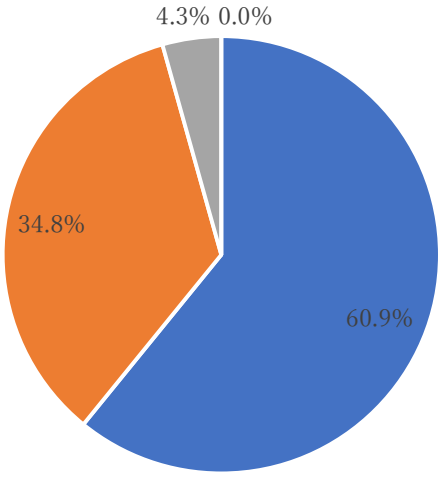
- 1　働くことの喜び
- 2　働くことの厳しさ
- 3　挨拶や言葉遣いなどのマナーの大切さ
- 4　コミュニケーション能力
- 5　主体的に行動する姿勢
- 6　仕事に対する心構え
- 7　時間を守ること
- 8　地域社会の中での企業の役割
- 9　その他

設問５　自分が行った仕事（職場）に対し、行く前と行った後のイメージの変化について教えてください。



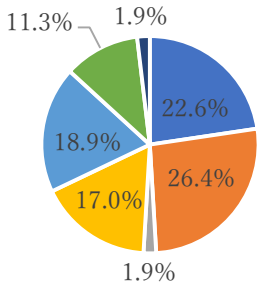
- 1 よくなった
- 2 あまり変わらない
- 3 悪くなった

設問６　今回のインターンシップが、将来の自分の進路決定に役立つと思いますか。



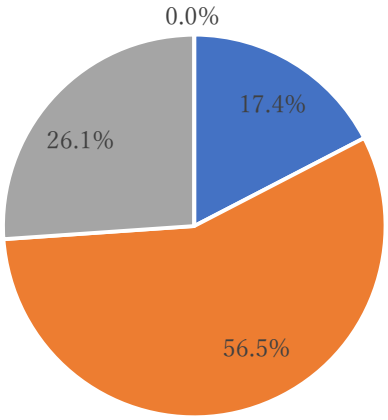
- 1 とても役立つ
- 2 まあ役立つ
- 3 あまり役立たない
- 4 まったく役立たない

設問７　インターンシップを終えての感想として、「働く」とはどういうことだと考えていますか。（複数選択可）



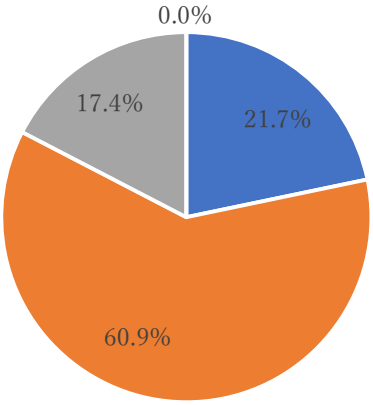
- 1 生きがい
- 2 収入を得る手段
- 3 アルバイトの延長
- 4 社会貢献
- 5 自分の能力や技術を高める
- 6 自己実現（夢をかなえる方法）
- 7 その他

設問８　社会に出ることへの不安は、インターンシップを体験する前と比べて増えましたか。



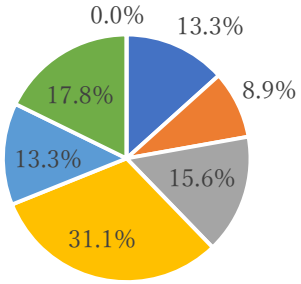
- 1 とてもあてはまる
- 2 あてはまる
- 3 あてはまらない
- 4 まったくあてはまらない

設問９　インターンシップを通して、社会人として求められていることを知ることができましたか。



- 1 とてもあてはまる
- 2 あてはまる
- 3 はてはまらない
- 4 まったくあてはまらない

設問１０　将来、社会に出るにあたり、自分に必要なことは何だと思いますか。（複数選択可）



- 1　資格取得
- 2　勉強
- 3　積極性
- 4　コミュニケーション能力
- 5　専門的な技術
- 6　強い精神
- 7　その他

設問１１　インターンシップの感想（自由記述）

・今回はお話を聞くことしかできなくて体験することができなかったから、また機会があれば体験したい。施設内を見学させてもらったとき、今まで私がみてきた施設とは違い、一つ一つが家のようになっていてすごく温かく感じました。
・担当者の人へもっといろいろなことを聞いておけばよかった…でも、自分の進路が少し見えてきたような気がする。
・今回はコロナの関係で体験できなかったけど、ゆうゆうの里について沢山知ることができました。施設も広く、施設の方も優しく接してくれてとてもよかったです。去年卒業した先輩もここで働いていて久しぶりにお話ができました。介護が必要な人にぜひ利用してみてほしいと思いました。
・説明会だけだったが、たくさんのことを知るきっかけになった。
・施設で働いていた熱海高校の卒業生の方がいたけれど、ゆっくり話を聞く時間がなかったので、いろいろ聞けたらよかったかなと思った。
・自分の聞きたいことを質問できて良かったです。
・説明しか聞いていないので、実技もやってみたかった。施設について知れたし、他の場所にも施設があるとわかったので、将来のことが考えられた。資格取得などに、協力してくれることがわかったから、夢に近づきやすい場なのかなとも思えた。利用者だけでなく職員とのコミュニケーションが必要と分かった。いろいろ勉強になったので、よかったです。
・働くことの厳しさを知りました。暑い中寒い中、毎日働いていると思うとすごいなと強く感じました。
・社員のみなさんがすごく仲良くて、店長さんにも堅苦しい感じがなくて、仕事じゃないみたいに楽しかったです。アウトレット商品の袋詰めをして何回も同じことを繰り返しているだけだったけど楽しかったです。
・商品の品出しだけじゃなく、カフェの方でも働かせてもらって、とても大変だけど、楽しくできたと思います。社員の皆様もとても優しく教えていただいたので、とても働きやすかったです。人間関係がとても良かった。
・事前に行う準備は問題ありませんでした。２日間で予定がぎゅうぎゅうというわけではありませんでしたが、私たち以外のお客様がいることをもう少し注意しなければいけなかったと思います。
・働くというのがどういうものか理解することができました。
・水道温泉課以外の課も見学してみたかった。自分たちが普段飲んだり使っている水について教えてもらえた。後輩たちや先生たちにもぜひ知っておいてほしいと思った。
・管の種類や漏水したときの対処方法などを教えてもらえることができました。
・自分が行った職場の人は全員優しくしてくれて暑くてどれだけ大変な時でも楽しそうな雰囲気でやっていていいなと思った。仕事をするにあたってどんなことが必要なのかなども教えてもらった。
・あまり体験とかはなかったけどお客さんとのコミュニケーションを見れて良かった。
・インターンシップで僕は４日間の８:00～15:00 まででしたがもっと長く働いてそれを毎日続けるとなると仕事はきついと感じました
・みんなとてもいい人だった。わからないところは聞けばよかったと思う。
・一つ一つの仕事のやり方をもう少し覚えればよかった。
・まだできることが少なかった。でもどんなことをやっているのか理解できたのでよかった。
・乗車体験できました。正直もっと乗りたかったです。自分には積極性がないことがこの２日間を通じてよくわかりました。

評価開発グループ

担当教員：　評価開発グループ教員

取り組みの概要

本事業の校内グループの１つである「評価開発グループ」が、今年１年どのような取り組みを行ったのかをまとめる。昨年度「評価開発グループ」では、本事業の目指すべき生徒像の柱である「探究力」「自発性」「協調性」の能力を評価する評価指標（ルーブリック）を作成した。

今年度は、そのルーブリックを本校の教育活動の中で実際に運用し、「本校に適した評価基準なのか」「わかりにくさ、使いにくさはないか」などを検討した。具体的には①本事業の中心的な活動の一つである熱校ラボ・熱海ラボにおいて生徒の自己評価（事前・事後）に活用する、②ビジネス観光類型、福祉類型の実習活動においてルーブリックを元にした評価を行う、という二点に取り組んだ。

取り組んだこと

①　熱校ラボ・熱海ラボにおいて生徒の自己評価（事前・事後）にルーブリックを活用する

(1) 自己評価表（事前・事後）の作成

昨年度作成したルーブリックは、横軸に「探究力」「自発性」「協調性」を置き、縦軸にＡ・Ｂ・Ｃの段階を示したものである。熱校ラボ・熱海ラボにおいて、生徒自身が自らの資質・能力を振り返るきっかけとなるよう、自己評価表（アンケート）を作成し、10 月（事前）と２月（事後）に実施した。アンケートの作成においては、生徒が答えやすいようルーブリックの各項目を具体例で示した。また、追加項目として自己肯定感に関するものと地域資源の活用に関するものも入れた。事後アンケートにおいては、「今年度自分が成長したと感じられる力」と「来年度、自分が伸ばしたいと考えている力」について、「探究力」「自発性」「協調性」の中から一つ選ぶという項目を追加した。事後アンケートを実施する際には、10 月に行った事前アンケートの結果も配布し、比較しながら記入できるようにした。

この自己評価表を生徒に行わせた狙いは２つある。一つは熱校ラボ・熱海ラボ（これに限らず本校で行われている教育活動全て）において、身に付けてほしいと考えている力を具体的に示すということである。二つ目は、生徒に自らの資質・能力を振り返る機会を設けるということである。このような狙いで実施したため、この自己評価表の結果については 10 月の事前アンケートと２月の事後アンケートの間で、必ずしも資質・能力の成長を期待するものではない。事後アンケートを実施する際に生徒にも説明したが、自分を見つめ直したり地域の課題解決学習を行ったりする中で、事前アンケートより自己評価が下がることもあり得るものである。

(2) 自己評価表（事前・事後）の結果

自己評価表の各項目は、その資質・能力の活用レベルが低い段階（C）から高い段階（A）

まで分かれている。そのため、事前・事後アンケートのどちらにおいても、活用レベルが低い段階ほど「あてはまる」割合が高く、活用レベルが高い段階ほど「あてはまらない」割合が高くなっている。

また、事後アンケートを実施するにあたって、生徒には「必ずしも事前アンケートよりも成長している必要はない」と説明したが、ほとんどの項目において１年生・２年生とも事前アンケートよりも事後アンケートのほうが資質・能力の向上が見られる結果となった。特に項目 30 と 31 は､以前より本校生徒が低いと言われていた自己肯定感に関わる内容だったが、１・２年生ともに大きく向上が見られた。

事後アンケートの最後に追加した「今年度自分が成長したと感じられる力」については、１・２年生ともに「協調性」が最も多かった。熱校ラボ・熱海ラボでのグループによる課題解決学習では、一人一人に役割を持たせて調査・まとめ・報告を行ったので、その効果が出たと言えよう。しかしその一方で､「来年度、自分が伸ばしたいと考えている力」については「自発性」が最も多かった。決められた授業や行事において教員がお膳立てをした中での活動はできるが、自ら課題を見つけて調べようとする力は不足していると感じている生徒が多いようであった。

②ビジネス観光類型、福祉類型の実習活動においてルーブリックを元にした評価を行う

(1) ビジネス観光類型

【ア　どのような評価を行ったか。】

・高校生ホテル本番２週間前に昨年度評価開発グループが作成したルーブリックを実習に合う形式に変更し、50 問×４点＝200 点での自己評価シートを作成した。

・高校生ホテル本番後、生徒の意識の変容を見るため、同様の内容の評価を実施した。ただし、前回の自己評価シートの項目が多すぎたため、項目数を 20 に変更し 20 問×５点＝100 点での評価を行った。また、自己評価と同様の内容で、実習先の従業員の方にも評価していただいた。

【イ　どのような結果が出たか。】

・本番２週間前の自己評価シートは、質問項目が多く質問の意図が端的ではなかったため、質問に答える生徒の前向きな姿勢が失われていたと感じる。例えば、全ての項目において４段階中の４（最高点）を付ける生徒がいた。また、現地実習をすでに行っている段階での自己評価であったため、全体的に高い評価をつける生徒が多かった。

・本番後の評価では、生徒が自ら定めた目標に対しては完璧にできたと答える生徒が多かったが、実習先の従業員の方の評価では低いという真逆の結果も見られた。

【ウ　評価するにあたって難しかった点、反省点、使いにくいと感じた点、良かった点等】

初期段階として、生徒に評価の目的を認識させる、意識させることが大切である。また、生徒に自己評価した根拠を説明させるという活動を踏まないと、評価の説得力が欠けてしまうということがわかった。また、従業員の方の評価を具体的な根拠とともに生徒にフィードバックしていかないと、生徒の成長にもつながらないと感じた。受け入れていただく企業の従業員の方に対しても、共に生徒を育てていくという理念を教員と共有する必要があるだろう。生徒には、具体的に「このような行動をすることが評価５である」といった基準を示すことも方法の一つである。評価も５段階ではなく、はい・いいえのように２拓にしても良か

ったかもしれない。いずれにしても、来年度以降も試行錯誤しながら評価の在り方を考えていきたい。

(2) 福祉類型

【ア　どのような評価を行ったか。】

科目「生活支援技術」での実技の授業において、昨年度評価開発グループが作成したルーブリックを授業内容に合わせて形式を変更した評価シートを用いた。

科目「生活支援技術」での実技の授業では、①理論の学習、②実技演習、③実技テストの流れで授業を実施している。評価シートを用いたのは、そのうちの②実技演習及び③実技テストである。毎時間、実技演習の開始前にその時間の目標を立て、その時間終了時にその目標に対する進捗状況及び次時に向けての課題を記載し、実技テスト終了後に各項目の評価を生徒が自己評価した。

【イ　どのような結果が出たか。】

実技に対する最終目標や各時間の目標、次時に向けての課題を記載することにより、「どのように実技の練習の時間を活用するか」が明確になり、「どのような点が苦手か」が生徒自身で考えることができていた。

しかしながら、質問項目が多く、質問の意図が端的ではなかったため評価シートの記載に時間がかかってしまうこともあり、評価することが作業的なものとなってしまっていた面も見られた。

【ウ　評価するにあたって難しかった点、反省点、使いにくいと感じた点、良かった点等】

評価シートを用いる最初の段階で、目標シートの活用の目的を具体的に生徒へ伝え、生徒が意欲的に自己評価を取り組むことができるような環境づくりが必要であった。また、評価をするにあたって基準を示していなかったため、自己評価の記載状況と実技テストの点数に差があった。このことにより、より自分自身の取り組み状況を客観的に判断できるよう、どのような状況であれば「４」と評価するのか、「１」と評価するのかの基準も生徒へ示す必要があったと感じた。

さらに、質問事項が多く、質問の内容が生徒に伝わりにくかったため、評価シート自体の構成を再検討する必要がある。

取り組みの成果

①　熱校ラボ、熱海ラボにおいて、生徒に身に付けてほしいと考えている力を具体的に示すことができた。同時に、それらの資質・能力が自身に身に付いているかどうか、生徒に考える機会を与え、多くの項目において成長が見られた。

②　実習科目において昨年度作成したルーブリックを運用し、その活用方法や課題を考えることができた。実習活動の途中で、評価をどのようにフィードバックして生徒の成長につなげるかということが今後の検討課題である。また熱校ラボ、熱海ラボ（総合的な探究の時間）のように評定（成績）がつかないようなものにおける運用は比較的平易だが、実際に評定（成績）がつく科目において、ルーブリックによる評価をどのように成績に結びつけるかが難しく、今後の研究が必要である。

今後取り組むべきこと

・地域に求められる人材を育成するための「座学の授業におけるキャリア教育」の検討・実施のため、昨年度作成したルーブリックを座学の授業においても運用を試みる。

・教員が「熱高ラボ・熱海ラボ」の活動をどのように評価するのか、どの段階で何を使って評価し、それを生徒にどのようにフィードバックするのかを検討・実施する。

・生徒に今年度「探究力」「自発性」「協調性」の中から、どのような点を伸ばしたいのかを考えさせ、年度末に自身の成長した点を根拠（エピソード）を元にアウトプットできるようにさせたい。

・本事業で目指している生徒像をどのように他教員に伝え、普段の教育活動に生かしてもらえるか、理念を共有する方法を考える。

熱高ラボ・熱海ラボ「自己評価（事後）」

HRNO（　　）名前（　　）

９月～２月まで、桃陵の時間に熱高ラボ（１年生）、熱海ラボ（２年生）を行ってきました。熱高ラボ・熱海ラボでは、様々な活動を通して皆さんの「探究力」「自発性」「協調性」の育成を目指しています。その三つの力について、**10月の事前評価と比較しながら**現在の自分がどのぐらい変化したのか、下のアンケートに答える形で自己評価をしてみましょう。

10月に比べて絶対に成長していなければならない、ということはありません。自分を見つめ直した結果、10月より自己評価が下がることもあり得ます。

		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
探究力C	1：現在の自分の学習面について、何が得意で何が苦手かわかっている。	4	3	2	1
	2：現在の自分の私生活や部活動において、こうなりたいという目標がある。	4	3	2	1
	3：将来の夢や高校卒業後の進路が定まっている。	4	3	2	1
探究力B	4：現在の自分の学習面の改善点について、どのようにしたら向上するか方法がわかっている。	4	3	2	1
	5：現在の自分の私生活や部活動において、どのようにしたら向上するか方法がわかっている。	4	3	2	1
	6：将来の夢や高校卒業後の進路において、どのようにしたらその目標に近づけるのか方法がわかっている。	4	3	2	1
探究力A	7：学習面や部活動等でわからないことがあった時、友達や先生にすぐに聞くことができる。	4	3	2	1
	8：文献やインターネットで調べた一つの情報だけでなく、様々なメディアやツールからの情報を使って多角的に判断することができる。	4	3	2	1
	9：将来の夢や高校卒業後の進路に向けて、計画を立てて実際に行動している。	4	3	2	1
自発性C	10：世の中（国内・国外）で、現在どのようなことが問題になっているのかを知っている。	4	3	2	1
	11：自分の住んでいる地域で、現在どのようなことが問題になっているのかを知っている。	4	3	2	1
	12：町の図書館の利用方法や、パソコン・スマホでのインターネット検索、辞書などの使用方法について理解している。	4	3	2	1

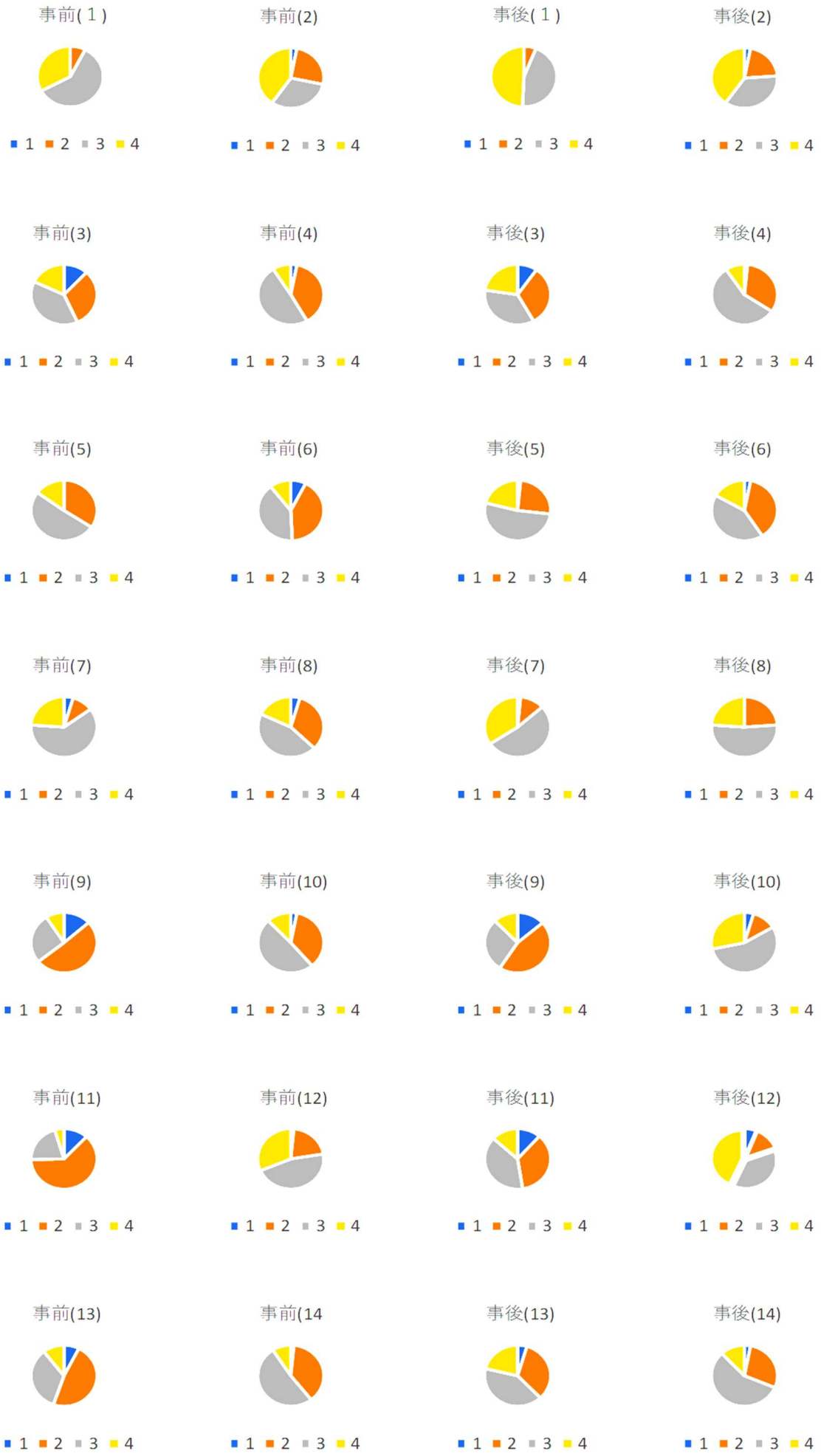
自発性B	13：世の中や地域にある問題が、自分自身にとってどのような関係があるのかを理解している。	4	3	2	1
	14：直面した問題や設定した課題について、多様な情報の中から必要なものを選び、適切に利用できる。	4	3	2	1
	15：直面した問題や設定した課題について、解決につながるようなアイディアを出すことができる。	4	3	2	1
自発性A	16：直面した問題や設定した課題について、解決につながるようなアイディアや意見を積極的に出し、行動することができる。	4	3	2	1
	17：一般的な解決策やアイディアにとらわれず、より良いものを自分たちの手で作り出そうという意識がある。	4	3	2	1
	18：目標達成や問題解決を進めるにあたって、大きな困難に出会った時もあきらめずに挑戦し続けることができる。	4	3	2	1
協調性C	19：社会には、一人だけでは解決できない問題があることを知っている。	4	3	2	1
	20：他人の意見を聞くことで、自分の視野が広がるような経験をしたことがある。	4	3	2	1
	21：一人では解決できない問題に対して、親しい友人に協力をお願いできる。	4	3	2	1
協調性B	22：一人では解決できない問題に対して、友人に協力を依頼し、お互いに協力しながら活動をすることができる。	4	3	2	1
	23： 友人と協力し合うことで、一人では解決できなかった問題や課題を解決した結果、自分のためにも友人のためにもなった経験がある。	4	3	2	1
	24：自分と親しい友人だけでなく、他の同級生や先輩との関係も大切にすることができる。	4	3	2	1
協調性A	25：必要に応じて、初対面の人や年齢・立場が異なる大人とも会話をすることができる。	4	3	2	1
	26：自分と考えが異なる人の意見も受け入れることができる。	4	3	2	1
	27：直面している問題や設定した課題に応じて、友人だけでなく様々な人たちとも協力体制をつくることができる。	4	3	2	1
	28：自分の住む地域の魅力について、他の人に語ることができる。	4	3	2	1
	29：自分の住む地域に、自分の将来のことや実現したいことについて相談に乗ってくれる人・支えてくれるような人がいる。	4	3	2	1
	30：自分には何か良いところがあると思う。	4	3	2	1
	31：自分には社会（身近なコミュニティ、地域、日本、世界等）を変えられるような力があると思う。	4	3	2	1

最後に、三つの中から一つ選んで〇をつけてください。

・今年度、自分が成長したと感じられる力　（探究力　／　自発性　／　協調性）

・来年度、自分が伸ばしたいと考えている力（探究力　／　自発性　／　協調性）

１年生　熱高ラボ　自己評価　集計結果



事前(15)

事前(16)

事後(15)

事後(16)

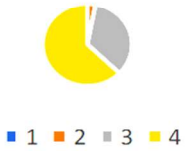
事前(17)

事前(18)

事後(17)

事後(18)

事前(19)

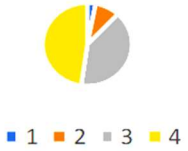


事前(20)

事後(19)

事後(20)

事前(21)



事前(22)

事後(21)

事後(22)

事前(23)

事前(24)

事後(23)

事後(24)

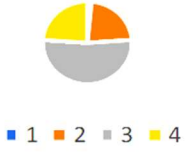
事前(25)

事前(26)

事後(25)

事後(26)

事前(27)

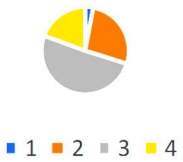


事前(28)

事後(27)

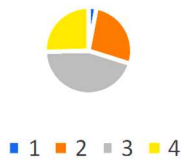
事後(28)

事前(29)

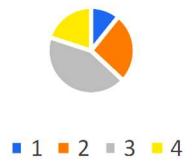


事前(30)

事後(29)

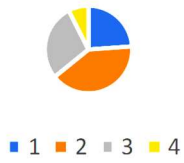


事後(30)



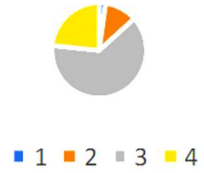
事前(31)

事後(31

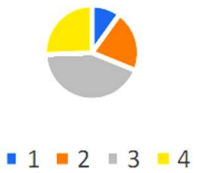


２年生　熱海ラボ　自己評価　集計結果

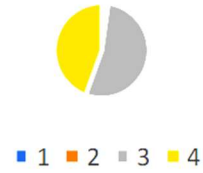
事前(１)



事前(2)

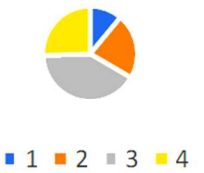


事後(１)

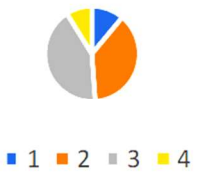


事後(2)

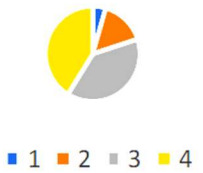
事前(3)



事前(4)

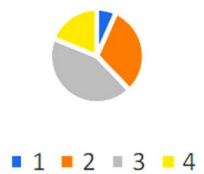


事後(3)



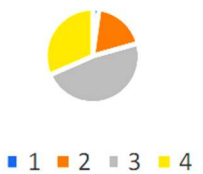
事後(4)

事前(5)

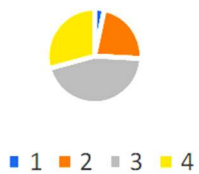


事前(6)

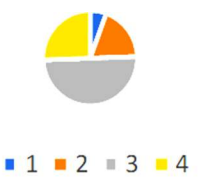
事後(5)



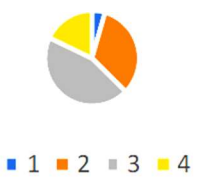
事後(6)



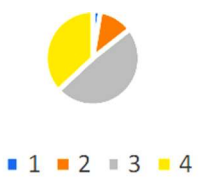
事前(7)



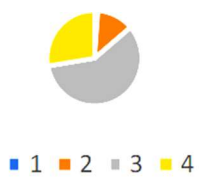
事前(8)



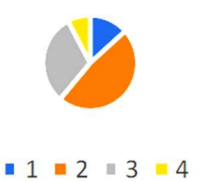
事後(7)



事後(8)

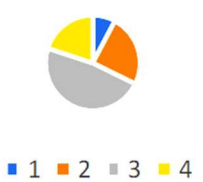


事前(9)

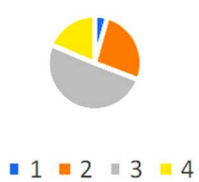


事前(10)

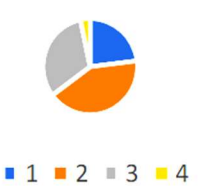
事後(9)



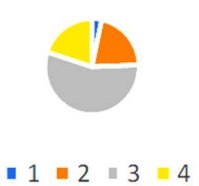
事後(10)



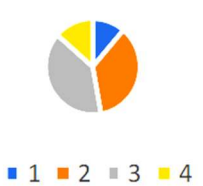
事前(11)



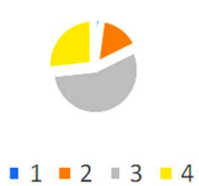
事前(12)



事後(11)



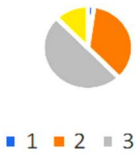
事後(12)



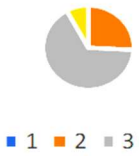
事前(13)

事前(14

事後(13)



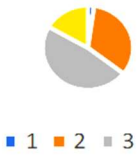
事後(14)



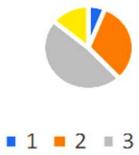
事前(15)

事前(16)

事後(15)

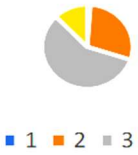


事後(16)



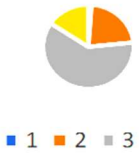
事前(17)

事前(18)

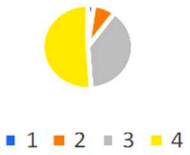


事後(17)

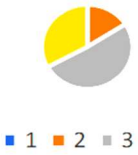
事後(18)



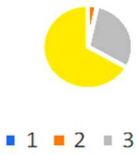
事前(19)



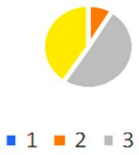
事前(20)



事後(19)

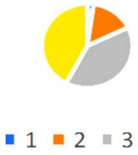


事後(20)

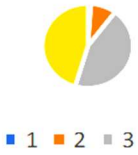


事前(21)

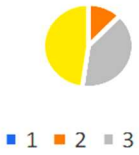
事前(22)



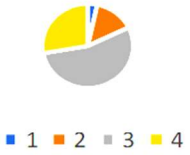
事後(21)



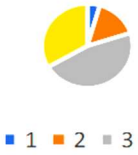
事後(22)



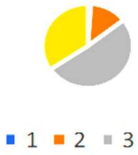
事前(23)



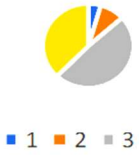
事前(24)



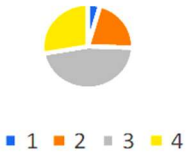
事後(23)



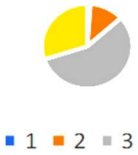
事後(24)



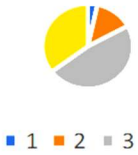
事前(25)



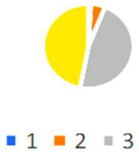
事前(26)



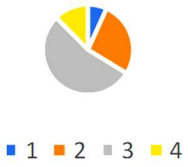
事後(25)



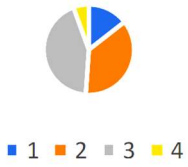
事後(26)



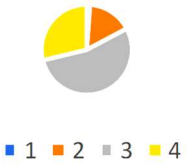
事前(27)



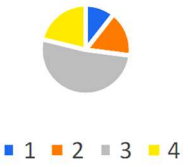
事前(28)



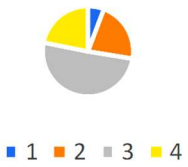
事後(27)



事後(28)

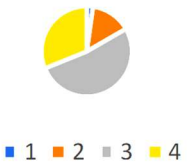


事前(29)

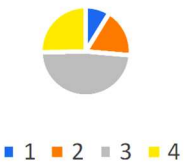


事前(30)

事後(29)



事後(30)



事前(31)

事後(31

校内地域連携推進委員会の取組み

概要

事業の指定を受けてから、今年度本校で開かれた「校内地域連携推進委員会」の活動内容を紹介していく。なお、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大による休校のため、４・５月の活動はほとんどできず、学校が再開した６月以降の取り組みの紹介となる。

● ７月３日（金）　第１回校内地域連携推進委員会（CASP 会議）

７月３日に文科省指定委託事業第１回校内連携推進委員会（CASP 会議）を開催した。委員は静岡文化芸術大学文化政策学科准教授船戸修一さん、地域協働学習実施支援員の水野綾子さんであり、委員の方々とともに“地域の課題に立ち向かい、地域のために貢献できる人材”の育成を目指し、協議する。第１回は、昨年度の取り組みの経過と、今年度の予定・計画についての確認となった。熱高ラボ・熱海ラボは今年度の予定や計画、教務企画グループは令和４年度入学生からの総合的な探究の時間の構想、商業科からレモンの木・高校生ホテル・起業家育成プロジェクトの計画、評価開発グループは昨年度作成した評価のルーブリックについて今年度の具体的な使用や改善の計画について、それぞれ確認・協議した。

● ９月 24 日（木）　第２回校内地域連携推進委員会（CASP 会議）

９月 24 日に文科省指定委託事業第２回校内連携推進委員会（CASP 会議）を開催した。協議では、総合的な探究の時間における取組として、熱高ラボ・熱海ラボの進捗状況や、今後の具体的な取り組みについての計画についての協議、商業科からは高校生ホテルの取り組みの進捗状況、福祉科からは今後の計画、評価開発グループからは評価ルーブリックをもとにした生徒用のチェックシートの作成など進捗状況について説明した。

● 10 月 22 日（木）　第１回運営指導委員会

10 月 22 日に第１回運営指導委員会を開催した。運営指導委員の先生方や高校教育課の先生方を招き、事業概要の説明、熱高ラボ・熱海ラボの進捗状況の確認、商業科からはレモンの木・起業家育成プロジェクトや高校生ホテルについて説明をした。また、令和４年度入学生からの総合的な探究の時間の実施計画についての案も提示され、今後の探究活動の位置づけを考えた。協議の中で、ご指摘いただいたのは、これから求められていくものはやはりコミュニケーション能力であり、聞く力・話す力をつけるためにこちらが様々なアプローチをしていくことが大事であるということを改めて確認した。

● **10 月 30 日（金）　「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミット（オンライン会議での開催）**

10 月 30 日に文部科学省主催の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミットが開催され、今年度はオンライン会議という形で参加した。開催テーマは、「学校と地域の連携・協働の在り方について」であり、全国から多くの学校が参加し、オンラインでのグループワークでは他校の取り組み状況など情報交換が行われた。

● **11 月５日（木）　第１回コンソーシアム連携会議**

11 月５日に第１回コンソーシアム連携会議を開催した。ここでは、校内の CASP 委員の先生方だけではなく、教育委員会高校教育課、熱海市役所、伊東法人会、多賀小学校、多賀中学校、熱海商工会議所、伊豆半島ジオパーク（敬称略）と協働機関の代表の方々にお越しいただき、今年度の事業概要や今後の計画について協議をした。10 月の運営指導委員会につづき、各グループからの活動の進捗状況と今後の取り組みの概要について説明した。

● **２月 15 日（月）第５回校内連携推進委員会（CASP 会議）**

２月 15 日に第５回校内連携推進委員会（CASP 会議）を開催した。今年度最終ということで、各グループから１年間の活動の総括と、３年目となる次年度の取り組みの計画について協議した。熱高ラボ・熱海ラボは休校の影響で全体的に時間が足りず、情報収集が難航して内容の濃い提案を考えるのに苦労したという状況の説明、教科グループからは、今年度の教科横断的な取り組みの報告、商業科からは高校生ホテルの実習の評価についての報告があった。実習の評価は自己評価と企業側の評価でずれが生じることがあり、改めて評価について考えさせられた。また、評価開発グループは、取り組みのまとめと次年度の計画について説明した。そのなかで、次年度以降の取り組みとして、CASP で目指していることをどのように他教員に伝え、普段の教育活動に生かしてもらえるかを考える、とあった。教職員全体でこの取り組みについて共有し、地域に求められる人材を育成していくためにこれまで以上に様々な取り組みをやっていくことを確認した。

＊＊

令和２年度　静岡県立熱海高等学校　研究開発報告

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」

日時　2021 年 2 月 24 日（水）　Web 公開

【報告書　執筆ｽﾀｯﾌ】

熱海高等学校教員等

【編集ｽﾀｯﾌ】

平沢圭子 ・ 永井幸子

2021 年 2 月 26 日発行

＊＊